

# A・R―芥川龍之介素描―

如月小春

## ◆登場人物

作家

その妻

その息子 兄

その息子 弟

医師

女

伝令

\*

編集者（我鬼）

夏服の男

\*

その他、芥川の中作品中の登場人物など、多数

## Ⅰ プロローグ

地下室のような、黒い、飾り気のまったくない、場所。

三方に、そそりたつような、ぶ厚い壁

上手の壁に、ドア。少し離れて二つ。

ドアから床まで、三段ばかりの階段。

下手側の壁にも、階段。

正面の壁の中ほどに、札が下がっている。

札には、墨で、「忙中謝客」と書かれている。

舞台中央に、文机。

文机の上に、きちんと揃えて置かれた原稿用紙が、文鎮で押さえられて、ある。

ペン皿に数本のペン。

ふろしき包みを持った、夏服の初老の男が、客席の通路から歩いてくる。

よほど暑い日、らしい。

男は立ち止まり、ポケットから白いハンケチを出して、額の汗をぬぐう。

舞台上手の階段に腰を掛けて、首筋のあたりをぬぐう、大きく息をする。

包みをあけて、中から郵便物の束をとりだす。

幾つもの封書の、差し出しを確かめたりし、その内の、書籍の入っているらしい封筒に目を留める。

封をあける。中には同人誌か何からしい雑誌一冊と、手紙。  
手紙を素早く読んで、たたみ、それからおもむろに、雑誌を開く。  
目次を見、ぱらぱらとめくり、中ほどの一編を読み始める。  
魅<sup>ひき</sup>き込まれるように、ページを繰る。

―暗転―

暗転中に、札、及び文机は片付けられる。

## 2 蜘蛛の糸

舞台上には、装置は何もない。

男が一人、横たわる。

もう一人の男が、彼を見つめている。

見つめる男が、語る。

語りに合わせて、横たわる男<sup>II</sup>カンダタが、動く。

語り手 ……は 見る

の時 みは 見る

たしかにそれは一本の  
ほそいほそい蜘蛛のいと

蜘蛛の糸

きみは見るたしかにそれは  
のばす手をのばす

その糸銀色のほそいほそい糸

天上から垂れさがる一本の糸  
きみの上

つかむのぼるきみはのぼる

一本のほそいほそい糸輝く

のぼるのぼるきみはのぼる

手首肘かたのあたり

背骨腰骨太股の付け根

膝足足の指指先

巻きつけたぐりたぐり寄せのぼる

引く引き寄せくい込む腕二の腕

きみは人を殺した家を焼いた

あがる火の手逃げまどう人

人を殺したきみは

盗んだ騙したうそをついた

捨てた逃げたい くどもいくども

打ちつけ へし折り 骨の碎ける鈍い響きを

き みは聴いた

聴いて笑った

そして そして 墮ちた

じごくの底の底

うめき 泣き喚き すがり もがき もがき苦しみ

……は 見る

の時 みは 見る

たしかに それは 一本の

ほそいほそい 蜘蛛のいと

天 上から 垂れさがる一本の 糸 銀の糸

のぼるの ぼる きみは のぼる

のぼるの ぼり 振り 返る見下す

はるか目 の下 霞 む 闇遠い炎 針 の煌めききら

きみ は喜ぶ笑う 笑 顔のきみ

天は 近い ああ 近い

語り手の背後に無数の人々。

人々、語り手の声に唱和する。

はじめは小さく囁くように、だんだんにはっきりと、そして大きく。

語り手・人々 けれど、の時みは見る

一本のほそいほそい 蜘蛛のいとの先

のぼるのぼり来る人 人の群

蟻 蟻のように群がりも つれあう人 人の群れが

つかむのぼる一本のほそいほそい 系き

みの系

巻きつけ たぐり たぐり寄せのぼるのぼり来る恐怖

叫ぶ きみは さ けぶ

カンダタ 下りろーっ！ 下りろーっ！

途端に目に見えない系は切れ、カンダタは落下して、床に崩れる。

語り手、人々、立ち去る。

舞台奥からやせた男——作家が登場し、カンダタの後ろに立つ。

間

カンダタ、去る。

舞台中央に文机。

文机にかがみ込み、作家は書いている。

筆の進みは遅い。

幾枚もの原稿用紙が握りつぶされ、投げられる。

その周囲に、無数の影。

額を寄せ合い、覗き込む。

押し合い、のしかかり、何事か囁き交す。

眉をひそめ、うなずき、卑屈に笑う。

作家は必死に振り払い、書く。

書き続ける。

影たちの中に、崩れたような風体の、肌のいやに生白い男が一人

——編集者だ。

編集者 はあん、やってますね。

彼が声を発した途端、影たちは瞬時にかたく沈黙し、何処へともなく消え去る。  
作家は、無視して書き進む。

編集者 どうです、進み具合は。

作家、出来上がって横に積んである分を、眼で示す。

編集者、手を伸ばし。

編集者 ほおっ、あるじゃない。……ひい、ふう、みい……十二枚、か。

おーっと、すごいじゃない。やるじゃない。

けっこう、けっこう。半病人の仕事にしちゃあ、特上の尾頭つきだ。

さんざぐだぐだ言ってたけれど、やりやあ出来るじゃない。この調子でいきやあ、五十枚や六十枚、あつという間の書下ろし長編、巻頭一挙掲載、来月号の目玉はこれで決まりだ。

ありがたや、ありがたや。

編集者、原稿を声に出して読む。

編集者 「人生は地獄よりも地獄的である。」

けど、中味ときたら、相変わらずだね。

わかったような、わからんような。

作家、原稿を奪い返す。が、またすぐに奪い取られてしまう。



編集者 「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのは莫迦莫迦しい。重大に扱わなければ危険である。」

「かっただけはいいけれど、字面が暗いときたもんだ。」

「ま、そこが受けてるんだから、文句は言いつこなし、と。」

「なんせ、世の中、真っ暗だもんね、ここんところ。あの大地震以来、いいことは一つもなし、逮捕に虐殺、恐慌に打ち壊し。ぶっそうな話ばかりだ。前はよかった。自由で、モダンで、華やかで……。いやはや、どうなっちまうのか。」

「もし正直になるとすれば、我々はたちまち何びとも……」

作家 やめろ。

編集者 「……何びとも正直になられぬことを……」

作家 やめないか。

編集者 「……見出すであろう。」——いいじゃないの、読んだって。どうせ来月になりやあ、本屋という

本屋の店先に並んで、とっばいのやら、しわくちやのやら、どこの誰ともわからん何千人、何万人の有象無象が目魚のようにバックリ開いてむさぼり読むんだから。

世の中全部マッチ箱にとじこめて澄ました顔しようたってそうはいかない。書いちゃったもんは、人が読む。読んであれこれいらんことを言う。おまけに原稿料までたんまりだ。

ケツ、ゴキゲンだね、人気の作家は。

作家 何しに来たんだ。

編集者 何しに来た、はないでしよう。ケケツ、毎度の御機嫌伺いに。これでも氣イ使ってるんですよ。退屈してやしないか、行き詰まってやしないか、お風邪でも召してやしないかと、そりやもう心配で心配で……

作家 仕事中は入るなど、門のところを書いてあったらう。

編集者 そうでしたかね。いや、いっこうに気がつきませんで。それはそれは、申し訳のないことを。

作家 帰ってこないか。

編集者 は？

作家 仕事中だから、帰ってこないか、と言っているんだ。

編集者 はあ、そりやまあ、お邪魔とあれば、すぐにも退散つかまつりますが。けど、残念だなあ、せつかく素敵なおみやげを持って来たのに。

(懐から、雑誌を二、三冊出す)

出ましたよ。こないだの、評。

作家、それらの雑誌をひったくろうとするが、編集者はひらりと身をかわして、渡さない。

編集者 おーっと、お邪魔じゃなかったんですか？ それはそれは。

一応、気にはなってる。なってるどころか、不安で不安でしようがない。

とじこめたはずの世の中が箱からするりと抜け出して、どんな仕返しするのかと、こわくてこわくてしようがない。

けど、読めば読んだで腹が立つ。

作家、すきをついて、奪い取るのに成功する。

すぐさま開いて読み始める。

編集者 ケツ、どうせロクなことは書いてやしないのに。

「A君の新作を読んだ。相変わらずの達者な筆である。書きだしの一文など、さすがと思わせる。が、しかし、読み通して何があったかと言われれば、それまでである。要するに、いつもの題材、いつもの調子なのだ。そこに、何かしら足りないものがある。おそらくは人間の息遣い、現実の確かな手触わりといったものが。」

それに比べ新進のN君の作は、その現実認識の確かさ、洞察力の深さに於いて、到底二十代の新人の手になるとは思われぬほどの仕上がりを見せている。N君こそ、まさにプロレタリア文学の新星と呼ぶにふさわしく、次代の我国の文芸をになう逸才として……」

作家、雑誌を不機嫌そうに閉じて横に置き、また机に向かう。

編集者 気にするこたあ、ありませんよ。あの糞っタレ野郎共ときたら、何にもわかつちやいなんだから。やっかんでるんですよ、あんたがあんまり人気なもんだから。

ケツ、何がプロレタリアートだ。あいつらのああいいうのも文学って言うんですかね。だいたい、文学っての

は……

作家 少し黙らないか。

編集者 は？ はあ……。

作家 書き直す。

作家、先ほどの原稿を破く。

びりびりと、ひきちぎるように。

編集者 あ、ああ……で、でも……

作家 一字、一句、一行、一句読点、書き直す。

編集者 そ、そんな……ああ、もったいない……巻頭一挙掲載が……

作家 気に入らん。

編集者 そ、そりやまあ、そうおっしゃるんですたら……でも……これはこれで……

作家 一字、一句、一行、一句読点。

編集者 あーあ、ったくもう……間に合うんでしようねえ。お願いしますよ、先生。メ切は今度の週末。ギリですよ。それ以上はビタ一日だって待てやしません。ほんとですよ。何とかして下さいよ。もし落したりしたら、こっちも困るし、あんだだって。爺さん婆さん、女房に子供等、おまけに姉貴ンチの面倒までおっかぶせられて、あんだ、金がある。同情しますよ、あんだもこれでなかなか大変だあ。

作家 出て行ってくれないか。

編集者 はい、はい。仰せの通りに。でも先生、メ切だけは、ちゃんと、ちゃんと、ですよ。

編集者、立ち去りかけて、出口のところまで振り返り。

編集者 ねえ先生。俺はね、好きだから。あんたのそれ。そのやり方。書くもの。ほんと、好きだから。それだけは覚えておいて下さいよ。

編集者、出て行く。

作家、一人、残されて。

作家 ほそいほそい 蜘蛛のいと 蜘蛛の糸

たしかにそれは一本の

ほそいほそい 蜘蛛のいと

天上から垂れさがる一本の

ほそいほそい 銀の糸 輝く

たしかにそれは……

機械のうなりのような低く深く鈍い響きが、始めは小さく、だんだんに大きくきこえてくる。

作家の背後では、巨大な歯車のようなものが回転しているようすが、うっすらと見えている。

作家、耳をふさぎ、必死に、呪文のような言葉を繰り返している。

作家 たしかにそれは一本の

ほそいほそい蜘蛛のいと……

突然、非常ベルのようなけたたましい音が鳴り渡る。

幾つも重なり合って、大きな音量で。

作家は驚いてとびのく。

ベルのあとは駆け抜ける靴音、秒針。そして音楽。

上手のドアから、同じような白っぽい服装の男たちが、

列になってゆつくりと進んでくる。

それとは別の場所から若い男が駆け込むのと、作家の妻が登場するのは、

ほとんど同時、かもしれない。

男Ⅱ伝令と、妻とは、同時に台詞を言う。

男は早口で、妻は普通よりすこしゆつくりめ、ではあるが。

男は喋りながら動きまわり、持って来たかばんに文房具や散らばっていた書き損じの紙などを次々と放り込んでゆく。

妻は、ふすまを隔てて話しかけているように。

作家は、混乱している。

妻 あなた、あなた。

伝令 出たって下さい。出たって下さい。さ、早く。何をぐずぐずしてるんですか。

妻 あなた、すいません。お仕事中に。

伝令 駄目ですよ。ほら、もたもたしないで。

妻 あの、ちよっと、よろしゅうございますか？

伝令 ああ、もう！ 困ったな。早く荷物をまとめて！ ほら、これも！ これも！ 来ちゃうよ。次の人、来ちゃうよ。

妻 あなた、あなた。

伝令 ほら、そこ、待ってるよ。あーあ、弱ったな。どうすりゃいいんだ。

妻 あの、先生がおみえになりましたんですけど。

伝令 言っただけでしょう、もうずいぶん前に。出ってもらって。ここはもうあなたの居場所じゃないんだから。次の人が決まったからって。

妻 いかがいましてしょう。

伝令 何やってんのよ、もう！ やんなっちゃうな。さっさとやってよ。

妻 上がっていただいでよろしゅうございますか？ それとも……

伝令 (歩いて来る人々に向かって) すいません。今すぐどかしますから。はい、はい、ちゃんと承ってお

りますです。

妻 それとも、今はお仕事だからと、お断り申し上げましょうか。

伝令 次の方は？ 作家？ ああ、若い。ええ、存じておりますとも。もちろんです。どうぞ、どうぞ、きつとお気に召していただけますです。（作家に向かって）ほら！ どけっつってるだろうが！ さっさと行け、さっさと！

伝令、荷物の入ったかばんを作家に無理矢理持たせ、走り去る。

音、消える。歩く人々、止まる。

妻 あなた、あなた。いかがいたしましたでしょう。

作家、我に返って。

作家 あ、ああ……そう……先生が……それは……わざわざ、遠い所を……構……わないよ……どうぞ、お通しして……

妻 はい。じゃ、そのように。

作家、疲れている。

歩く人々の内の一人、医師が、作家に近寄って挨拶する。旧知の友人のように。



それから、普通の世間話でもしているかの如く。それらの動作はすべてマイムで。

妻、客席に向かって台詞。

作家と医師は、文机の前に、背中合わせて座っている。

妻 主人はその頃、二階の八畳間を書斎にしておりました。

主人は人並以上に神経が細かい方でしたから、仕事中は物音などたてぬよう、よくよく気を遣いました。来客なども多いのですが、よほどのことでない限り、お約束のある方以外はお断り申し上げました。

家には、主人の養父と養母のほか、伯母もいて、おまけに小さい子供たちもおりましたから、ちよつとした揉め事でもあろうものなら、仕事に障るのではと、大変気になりました。

私はもう、ただ、家の中のことです。手いっぱい毎日でしたが、主人には、少しでも早く仕事が進むような状態でもらいたいと、それのみ思い、気を遣い。

妻、立ち去る。

医師 どうですか、その後、調子は。

作家 ええ、おかげさまで。身体の方は何とか。

医師 そりゃあ、よかった。

作家 けれど、

医師 ん？

作家 眠れないんです。

医師 あ、そう。

作家 眠れないんです。

医師 この頃の夜の蒸し暑いのも、ナンだからね、心に障る。

作家 眠りかけると、すぐに夢を見るんです。

医師 あ、そう。どんな夢？

作家 悪い夢です。悪い……

これらの会話は、後半になるに従って、速度がどんどん遅くなってゆく。ぜんまいのほどけきった人形のように、二人の身体はかしぎ、倒れんとするところで、止まる。台詞も止まる。

一瞬の間。

雷鳴。

はじかれたように二人、飛びのく。

文机、片付けられる。

### 3 羅生門

下手に階段。

舞台奥に、貧しい身なりの男。腰には短刀。 ”下人“ である。

下人 京の都、洛中に、「羅生」という名の門在り。

荒れに荒れ果てたる門なり。

朽ちに朽ち果てたる門なり。

この頃の都に振りかかりたる災い、ひきもきらず。

地震、大風、火事、饑饉、流行病に辻強盗。

病いにて果てたる人々、飢えに飢え入りて死にたる人々、数知れず。

それら、看取る者として無き無縁の死人を、この羅生門に持ち来たりて、捨て置くという。

死人の門に近寄る人無く、ただ百羽、二百羽、三百羽の鴉のみ飛からすび来たる。

肉をついばむ。

ががと鳴く。

とある暮れ方、その羅生門の下に、人の下人あり。

我、在り。

雷鳴。 激しい雨音。

上手に語り手、ろうそくをともして、うずくまる。

語り手 激しい雨でございました。冷たい雨でございました。

いつやむとも知れぬ雨でございました。

けれど、やんだところでどうなりましょう。

下人は、主人に暇を出されたのでございます。

雨がやんだとて、行くところがございませぬ。帰るところもございませぬ。

下人 あああ……

語り手 下人には、今宵の寝ぐら、一すすりの粥かゆのあてすらないのでございます。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選ぶいとまはございませぬ。

もし選ぼうものなら、待っているのは飢えと寒さと、羅生門の鴉ばかりでございませぬ。

さすれば、

下人 さすれば、我もまた、盗人になるより他はあるまい。

されど、

語り手 されど、下人には、その勇気がなかったのでございます。

下人 俺は、人と生まれてこの方、盗みを働いたことなど、いやさ、盗もうと思ったことすらない。盗みは

悪じゃ。人の道にはずれた仕わざじゃ。なむだぶ、なしだぶ。

されど、

語り手 されど、他にどんな手立てがございませぬや。

下人 あああ……

語り手 思うても思うても心は決まらず、とにもかくにも今宵一夜、静かに眠るが必須と、門の上の楼へ続く梯子段に足をかけたのでございます。

下人、刀を抜き、下手の階段の裏からのぼる。

階段の上まで来て、見おろす。

舞台には、死人が折り重なるようにして倒れている。

倒れているのが、ろうそくの揺らぐ火の光の中に、見えている。

下人は、異様な臭気に顔をおおう。

下人 ……なんと……

が、その次の瞬間に、下人の表情が止まる。

死人の山の中に、動く者がある。

老婆である。

老婆は、片手に髪束を持ち。

もう一方の手で、死人の髪を抜いている。

小さな声で念仏を唱えながら。

語り手 それは、老婆でございました。

老婆は、死人の髪を一本、また一本と抜いているのでございました。

それと知った途端、下人の心から恐怖は消えました。

かわって、ああ、激しい、強い憎悪の念が、湧き出でて止まらぬのでございます。  
老婆は、盗んでいるのでございます。  
人の毛を、盗んでいるのでございます。  
下人はかつて思ったことのないほど、激しく、強く、憎みました。  
盗みをはたらく者を憎みました。  
先ほど己れがあれほど盗人になろうかどうか迷うたことなど、とんと忘れて。

下人、刀を振りかざして叫ぶ。

下人 うおおうっ！

老婆ははじかれたように、飛び上り、逃げる。

下人 おのれ、どこへ行く！

下人は老婆を追いつめる。

つかみあう二人。

下人はとうとう老婆の腕をつかんで、ねじ倒した。

下人 何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。

下人は刀を老婆につきつける。

老婆は声も出ない。

下人、少し声を和らげ。

下人 俺はけびいし検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者じゃ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分この門の上で、何をしていたのだから、それを俺に話しさえすればいいのじゃ。

老婆は下人の表情をじっとうかがい、それからあえぐように声を出す。  
話し始める。

老婆 この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつら鬢にしようと思ったのじゃ。

下人、侮蔑しきったように、唾を吐く。

老婆、口ごもりながら。

老婆 なるほどな、死人の髪を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。

じゃがな、ここにゐる死人どもはな、皆、そのくらいなことえをされてもいい人間ばかりだぞよ。

ほれ、この、私が今、髪を抜いた女などは、蛇をな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのをな、干魚だと言つて、太刀帯の陣へ売りに住んだわ。

疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに住んでいたことである。

それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと言つて、太刀帯どもは、欠かさず晩の菜にと買つていたそうな。(老婆、乾いた笑いをたてる)

わしはな、わしは、この女のしたことが悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、しかたがな

くしたことである。されば、されば、今また、わしのしていたことも、悪いこととは思わぬぞよ。

これとても、やはりせねば餓死をするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知つていたこの女は、おおかたわしのすることも、大目に見てくれるである。

下人 きつとそうか。

語り手 それは、勇気のようなもので、で、ございました。けれど、それは、先ほど盗みを憎んで老婆をとら

えた時の勇気とは、正反対の勇気でございました。

下人 きつとそうか。

語り手 その勇気は、ふいに静かに湧き出でて、みるみる内に広がつて、下人の心から、あらゆる迷いを消し去つたのでございます。

下人、刀を鞘におさめ、唾を吐き飛ばす。



老婆の襟をつかんで言う。

下人 では、俺が引剥ひはぎをしようと恨むまいな。

俺もそうしなければ、餓死をする身体なのじゃで。

下人は、素早く老婆の着物をはぎとる。

取りかえそうとしがみつく老婆を蹴倒し、階段を上り、梯子を飛び降りて、いずこへか走り去る。

老婆、まもなくして身体を起こし、階段をはい上がり、梯子の口まで行って、下をのぞき込む。

——暗転（短く）

激しい雨音、続いている。

橋桁の下、と覚しきところに、作家がかばんを抱えてぼんやり立っている。

編集者が、上着を雨よけにした格好で、駆け込んで来る。

編集者 ひえい、ひっつてえ降りだ。いきなり降って来やがった。

天の底がずっぽり抜けでもしたんですかね。

ああ、ああ、こんなに濡れちゃって。

(手拭で作家の身体をあちこちぬぐってやりながら)

少しは気をつけなくっちゃ。だいたいお道具が丈夫な方じゃないんだから。

あれ、あれ、こんなに冷たくなっちゃって。これじゃまるで死人だよ。おっと、縁起でもねえ。

(荷物を持ってやり、上着をきせかけて)

ほれ。——さてと……

(荷をほどいて、原稿の束を取り出そうとする)

どこまでお進みですか、と。拝見、拝見……あれ、あれあれ……あれあれあれ……

先生！

作家 ない。書いてない。

編集者 ない？ 書いてない？……って、ご冗談でしょ！ おい！ ちょっと待て、何だって？ 書いてな

い！ 冗談じゃない！ 約束がちがう！ ちがうちがうちがう！

言ったじゃないですか、メ切は週末だって、ビタ一日だって延ばせやしない、俺、ちゃんと、ちゃんと、

言ったじゃないですか！

やだな、もう！ 何考えてんだ、こいつは！ ナメんじゃねえよ、え！ どうしてくれんだよ、おい！

落っこちちゃうじゃねえかよ！

何で、何でこんなこと！

作家 書けないものは、書けない。

編集者 エバンじゃねえよ、え、先生様よ。作家だか何だか知らねえけどよ、あんたがいくらふんばって書

いたってよ、それが活字になって世間様にお目通りしなきゃ、あんた、ただの無駄飯喰いのしんねり、むつつりだ。俺等がいて、ちゃんと御本に表紙をつけてさしあげて、え、そいでもってこそ、あんたはふんぞりかえって、作家先生やってられるんだ。そこんどこ、ちゃーんとわかってモノ言えってんだ、このボケナス野郎のうらなりビョータン！モノ書きなんてよ、俺等がいなきゃ、ただのクズよ。世間のやつかいもんよ、たきつけの紙っぺらにする以外、何の役にもたたんもん、作りやがって。

作家 わかっている。わかっているよ。

編集者 わかっているって……ちがうよ、そうじゃないよ、そんな風に言って欲しいんじゃない——ああ、もう、どうすりゃいいんだ……てやんでえ、書いて欲しいんだよ、俺は。あんたに、あんたの言葉で、あんたの世界を。書いて欲しいんだよ。わかってよ。

作家 書けない。

編集者 駄目、駄目、駄目。絶対駄目。書くと言ったら、書く。俺が書かせる。

編集者、文机を持ち出して来て、手拭で水気を拭きとり、

かばんの中から原稿、ペンを出し、並べる。

編集者 はい、はい、はい、はい。ほら、ここ、座って！

作家、ぼんやりと立ったままである。

作家 出来ない、出来ないんだよ、ほんとうに。浮かんでこないんだ、何も。頭の中が……  
編集者 大丈夫。出来る。あんたなら出来る。

編集者、作家を無理矢理、文机の前に坐らせる。

編集者 あんなに書いて来たじゃないですか。

あんたまだ、学生だった頃から、古今東西何でもござれのたいした博識縦横無尽で、こわいものなしの文壇の風雲児だった。

書くもの、書くもの、絶賛に次ぐ絶賛で、またたく間に、誰もが羨む天才作家の称号を奉られた。

俺は驚いたね。こんな文章を書くやつがいるのかってね。こんなこと、思いつくやつは、いったいどんな面下げてやがんのかってね。舌を巻くってのはこういうことを言うんだね。

確かにあなたの書くものは短い。本数も決して多くはない。が、そこがまたいい。

出来ますよ。何てこたない。あんたなら、ちよろつとした思いつきから、手品みたいに本物の鳩もライオンもひねり出せる。資料かなんか、要りますか？ 何なら俺が一っ走り行って……

作家 書いてどうなる？ どうせたきつけの材にしかないものを。

編集者 わかった。悪い。謝りましょう。俺が言い過ぎた。ね、忘れて下さい。この通りです。だから……

作家 何の役に立つ？ 書いて書いて書いて、狭い世間がさあざあ騒いで、それでどうなる？

編集者 はい、そこまで。もうやめましょ。

さあ、ペン持って。王朝物ですか？

それとも キリシタンもいいな、あ、そうだ、お伽話のシリーズ、あれにしよう。あれなら書ける。  
作家 ……………

編集者 ……じゃあ、新しいところで、私小説なんざ、どうです？ 昨今の流行ですぜ、自然主義。ここは一発、ズガンとかましてやったら。

作家 何で書かなきゃならない？ 自分のことを書かなきゃならない？ ボロボロと、グズグズとしたものを、吐き捨てて、暴露して、何が面白い？  
誰が知りたい？ そんなもの。

編集者、どうしようもないというふうに頭をごしごしとこする。

作家 本所両国。美しい家など一つもなかった。

家々も樹々も往来も、妙にみすぼらしい町だった。

砂埃りと泥濘とみすぼらしい人々がいるばかりのその町で、僕は育った。

その町には川があった。

青い油のような水が流れ、吐息のような、覚束ない汽笛の音が、いつも、いつもきこえていた。

僕はひよわな子供だった。

ひよわな子供は窓からそのみすぼらしい町を眺めていた。

眺めるのに飽きると、本を読んだ。

読んで空想した。

ありとあらゆるもの、恐いもの、怪しいもの、清いもの、痛ましいもの、について、空想した。薄暗いランプの下で、空想した。

人生を、空想した。

窓の外を往き交う人々と触れ合う前に、だから僕は、知っていた。愛を、憎悪を、虚栄の心を、知ったつもりになっていた。

客席の通路から、妻がゆっくりと歩んでくる。

作家 その町に生きて、二十歳を過ぎて、僕は……僕は……ある女を愛するようになった。

結婚したいと女に伝え、それから家のものに、その話をもち出した。

そして、激しい 反対を受けた。

僕の大切な伯母が、夜通し泣いた。僕も夜通し泣いた。

泣いて、泣いて、僕は、あの女のこととは思いつくと、ついに皆月に言った。

それぞれ別の扉から、二人の息子がゆっくりと歩んでくる。

作家 不愉快な、気まずい日々。

女の口元はひどくこわばり、後ろも見ずに帰って行った。

その後、女が神経を病んでいるということを聞いた。

眠れないというのをきいた。

僕は、さびしかった。

僕の、人を不幸にするということがさびしかった。

僕は……僕は……僕が見苦しく、まわりの者も皆、見苦しく、

それを眼のあたりにして生きるのが、なおも苦しく、

人の生きてあることの一切、生きて愛することの一切は見苦しく、

けれど見苦しくない一生は更に息苦しいに違いはなく、

されば、何故<sup>なぜ</sup>こんな<sup>なぜ</sup>にまでして生き続けなければならぬのか、

こんなところで生き続けなければならぬのか、

——遠くへ。出来るだけ遠い方へ。静かなところへ、行きたい、

僕は……

誰か、教えて下さい。

ふとした拍子に転げ落ちてしまったこの場所から、出て行く道を、教えて下さい。

この、やりきれない、情容赦のない、という事実を。

遠くから、一番遠くから見、確かな一編の物語、一字、一句、

ゆるぐことなく整った、

確かな言葉に……

さもなくば……

編集者 ……あ、あそこ、流れてる。何か、死体、のようなもの。

坊主頭の……。

柳、アカシア、椎の若葉、船宿の白い行燈、土蔵の白壁、伝馬船……

つぶやくように、拗ねるように、舌うつように……

暗い川だね、実際。

あなたは気がつくど、いつもここに來てる。

あなたの生まれた川のほとり。この、大川のほとりに。

——やんだ、かな？……どれ……

編集者、立ちあがる。

途端に鋭い汽笛を響かせて、列車が頭上を走り抜ける音。

作家、ひどく驚く。

ゆっくり歩いていた人々、脱兎の如くに走り出す。鋭角的なラインで。

伝令が作家に駆け寄り、何事かわめいている。

伝令 デモだよ！ デモが來るんだよ！

治安維持法だよ！ 治安維持法が発令されたんだ！ 反対してるんだよ！

反対のデモが通るんだよ！ ここを通るんだよ！

列車、去る。



編集者、消えている。

走っていた人々、肩で大きく息をしながら、その場にくずれている。  
くずれながら、妻は。

妻  
……あなた……あなた……あなた……

作家、妻の音がどこからきこえるのかわからずにいる。

再び列車が通る。

人々、走り出す。

伝令は、わめきながら、荷物をまとめる。

伝令 どいて！ どいて！ 駄目だよ、ここにいちや！

デモだよ！ デモが来るんだよ！

すごいデモだよ！ 皆、反対してるんだよ！

危いんだよ！ すごく危いんだよ！

伝令、かばんを作家に無理矢理持たせる。

紫の火花、のようなもの、空中に散る。

激しく、散る。

列車、去る。

妻  
……あなた……あなた……

作家、よろめいている。

妻、なんとか立ち上り、作家の側によるめきながら寄っていく。

再度、汽笛の音、そして列車の。しかし遠くに小さくきこえている。

それに混じって、多くの人々が声をあげているような物音。

二人の息子、こわがって、身を縮めている。

伝令、戸口で振り返り、声を殺して。

伝令 デモだよ！ デモが来るんだよ！

治安維持法だよ！ 治安維持法が発令されたんだよ！

反対してるんだよ！ 皆、反対してるんだよ！

すごいよ！ すごいデモだよ！

時代は変わったんだよ！ 天皇が死んだんだよ！

もう、何もかも終わりなんだよ！ 危いよ！ 危いよ！

どかないと、つぶされちゃうよ！ さ、早く！

音、消える。  
伝令、去る。

妻 ……あなた……あなた……

作家 ……ん？

妻 ……あ……いえ……

作家 ……何？

妻 ……いえ……いいんです……ただ、ちょっと……

作家 ……ん？

妻 ……ちよつと……あなたが……死んでしまうような……そんな予感がして……淋しくて……恐ろしくて……  
……たまらなくなつて……それで……

作家 ……ん。……大丈夫……大丈夫……

妻 ……ええ……ええ……

作家 ……大……丈……夫……

妻 ……あなた……あなた……？

妻、不安にかられて、作家を強く抱きしめる。

作家 大丈夫……大丈夫……

妻 ……ええ……ええ……

作家 ……紫の……火花……火花のような、<sup>生</sup>……生きたい……烈しく……あの、一瞬の、火花のような生

命……<sup>ラ・ヴィ</sup>生……のような……<sup>生</sup>……

再び、紫の火花、のようなもの、散る。

機械のうなりのような低く深く鈍い響きが、またしてもきこえてくる。

始めは小さく、だんだんに大きく。

巨大な歯車が回転している。

ゆっくりと。

作家 ……<sup>生</sup>……<sup>生</sup>……<sup>生</sup>……<sup>生</sup>……

楽しく懐し気なダンス音楽、きこえ始める。

兄、立ち上がる。

兄 (兄としてでなく)

ラ・ヴィ・アン・ローズ。

ラ・ヴィ・アン・ローズ。

舞踏会です。舞踏会が始まります。  
皆様、さあ、どうぞこちらへ。  
どうぞこちらへ。

機械のうなり・歯車、きえている。

音楽と共に、踊るようにして、舞台転換。

人々は皆、にこやかに。

作家、妻に伴われて、その輪を抜けて去る。

#### 4 杜子春

舞台は、少々いかがわしい安キャバレーか何かのように。

高さの異なるスツールが四基。

身の丈をはるかに越すようなものから、腰を掛けられる高さのものまで。

それらは、テーブルになったり、椅子になったり、その他、いろいろな用途に用いられる。  
正面奥に、階段。

人々は、舞台のあちこちに散って、てんでに話したり、けたたましい笑い声をたてたり、  
ウェイターは、飲物を運んだり。

女が一人、騒いでいる。

男にからかわれているらしい。

女 やだ、ちょっと、やめてよ。

男 いいじゃんかよ。な、ちょっと、逃げんなよ、おい、こちら。

女 やだ。やだっばあ。

男 待てよ！ 待てったら。

男、女を追いかけてまわしている。

その他の人々、下卑た笑いで。

そこへ、この安キャバレーのような場所の「マダム」らしき美貌（？）の女丈夫が近寄り、場をおさめる。

それら、一連の出来事からはなれた場所で、ポツンと一人、ひどくつまらなそうな表情をした若い男が、壁にもたれて。

その青年に近寄って声をかけたのが、この物語の、語り手である。

語り手 と・し・しゅん！

青年の名は、杜子春。

杜子春、答えない。

語り手 と・し・しゅん！ 何やってんの？

杜子春 ンだよ、うるせえな。

語り手 どうしたの？ 御機嫌斜め？

杜子春 ンなんじゃねえよ、うるせえな。

語り手 こっち来ない？ 遊ば。何かして遊ば。ね。それとも、あ、何か飲む？ 持って来ようか？ 何がいい？

杜子春 いいつつってる だろが、ほっといてくれよ！

語り手 あらら、駄目だ、こりゃ。どうしたの？ 元気、ないじゃん。何か、あったの？

杜子春 ねえよ！

語り手 そうかなあ。ないって顔じゃないけどなあ。いつもと全然違うよなあ。らしくないよなあ。飲まないし、遊ばないし。女に手も出さないし。

おっかしいなあ。

杜子春、うつむいている。

語り手 どしたの、ほんと？ 何か、心配事？ フラれたの？ あ、フラれたんだあ、そうだ。きっと、そ

うだ。

杜子春、首を横に振る。

語り手 違うの？ じゃ、何？ 喧嘩？ 喧嘩したんだ、負けたんだ。やられちゃったんだ。

杜子春、首を横に振る。

語り手 それも違うの。

杜子春、首を縦に振る。

語り手 じゃ、何？ 何があったの？ ね、力になるよ。何でもするよ。だから、言ってよ。何があった

の、ねえ、杜子春？

杜子春 ……………金、貸してくんねえか！

語り手 か、ねえ？

杜子春 貸してくんねえか！ 百万か二百万、いや、三千万か四千万でもいい。貸してくんねえか！

語り手 さ、三千万、四千万…………て……

杜子春 返すからよお！ 絶対に返すから、な、金、貸してくれよ！ 頼むよ！



語り手 だ、だ、だって、お前ンチ、すっぱえ金、あるじゃんかよ。オヤジ、すっぱえ金持ちじゃんかよ。  
杜子春 ねえんだよ。倒産したんだよ。借金しよって、逃げたんだよ。チキショー。

な、貸してくれ。五億とは言わん、七億か八億……

語り手 で、でも……そ、そんな、俺だって……

杜子春 頼むよ！ 俺、腹減ってんだよ。おとといから何も喰ってないんだよ。泊まるころはないし、外は寒いし、情けねえよお、ああ、こんな目にあうんだったら、もう、死んだ方がましだよお。

語り手 あれあれ……しょうがないねえ。どうしたもんかねえ……あ、そうだ、いいこと思いついた！

杜子春 え？

語り手 あの人に相談すればいい。

杜子春 あの人？

語り手 あの人……人……うん……あの方、かな。大丈夫、きっと何とかしてくれる。

杜子春 ええっ!!

語り手、走って言って、”マダム“に何事か説明し、連れて来る。

マダム あなた、杜子春、ていうの？

杜子春 は、はい。

マダム まあ、可愛いお名前。

杜子春 え、あ、いえ、ど、どうも……

マダム 可哀そうに。話はきいたわ。ほんと、可哀そう。

お金ね。お金がいるのね。大丈夫、心配しないで。私が何とかしてあげる。  
杜子春―ほ、ほんとですか???

”マダム“、杜子春の肩を引き寄せて、囁くように。

語り手、横で耳をそばだてる。

マダム あのね、あそこのテーブルの下に、鍵が一つ落ちてるわ。

その鍵を持って、今夜十二時、北口のトイレの横のロッカールームに行つて、右から四列目、上から三段目のコインロッカーを開けてごらんさい。NTTの株券が入ってるから。

それをインサイダー取引したら、あつという間に十億や二十億……

杜子春 十億や二十億!

マダム シッ! いいこと? 右から四列目、上から三段目よ。

杜子春 はいっ!

杜子春、走って行って、鍵を見つけ出す。

語り手 そして、その夜……

あたり、ふっと暗くなる。

スポットライトの中で、杜子春、ロッカーをあけている。

紙袋。中にはぎっしりと株券。

杜子春、袋を強く抱きしめる。

周囲に誰もいないか、素早く確かめ、袋を抱えて走り去る。

スポットライトの光の中に、語り手、器用にもぐり込む。

客席に向かって、話し始める。

語り手 その株券のおかげで、杜子春は、またたくまに大金持ちになったんだ。

ああ、なーんてうらやましい!!

杜子春はその金で、まず、西麻布に土地を買った。

その土地にでえーっかい家<sup>ウチ</sup>を建てた。

リビングルームは百三十畳。

もちろん風呂は、リモコンピピピでお湯が入るし、

ガレージにはベンツにフィアット、ポルシェ・カレラだ。

その家で杜子春たら、毎日毎晩、大宴会。

語り手の背後で、宴会の様子がパントマイムで繰り広げられる。

真ん中にいるのはもちろん杜子春。

取り巻き連中に囲まれて、すっかり出来上がってる。

語り手 女優に政治家、財界人、来るわ来るわで、連日連夜のどんちゃん騒ぎさ。

そのうち噂をききつけて、貧乏な時は見向きもしなかった親戚や、道で会っても、挨拶さえしなかった友だちなんかまで、やってきた。

杜子春は、もう御機嫌！

飲めよ、酒！ 歌え、カラオケ！ 女ときたら、よりどりみどりで！

——しかし。

いくら大金持ちでも、毎日そんなことを続けていたら、お金がなくなる。おまけに株価が突然値下がりをはじめたもんだから、ひとたまりもない。

背後の人々、杜子春を残して、一人、また一人と去ってゆく。

語り手 あんなにあった金があればよあれよという間に減ってゆき、

それにつれて、女優も政治家も親戚も、一人、また一人と来なくなり、友だちは、道で会っても挨拶一つしなくなり、

ついには……

そこはまたあの、安キヤバレーである。

どうやら看板らしく、お客は隣の方に酔っ払いが一人、つぶれて残っているだけ。  
騒ぎのあとがテーブルや床に散らばり、ウェイターがやる気なさそうに掃除をしている。  
そのキャバレーの片隅に、ポツンと一人、ひどくつまらなそうな表情でしゃがみ込んでいるのは……

語り手 と・し・しゅん！

杜子春、答えない。

語り手 と・し・しゅん！ 何、やってんの？

杜子春 ンだよ、うるせえな。

語り手 あれあれ、すっかり御機嫌斜めだ。

杜子春 ンなんじゃねえよ、うるせえな。

語り手 どしたの？ 何か、あったの？

杜子春 チェツ、知ってるくせに。バツくれんじゃねえよ、ったく！

語り手 ないんだ、お金

杜子春、うつむく。

語り手 なくなっちゃったんだ、全部。

杜子春、涙をこらえている。

語り手 食べるものも。

杜子春、今にも泣き出しそうに。

語り手 泊まるところも。みーんな、ないんだ

背後でウェイター、酔っ払いを揺さぶり起す。

”マダム“がその様子を、ドアのところで見ている。

出ていく酔っ払いに、優雅に手を振る。

それから店の中に入り、ウェイターに指示している。

杜子春、こらえきれずに。

杜子春 ああ、情けない。こんな目にまたあうんだったら、もう、ほんとに、死んだ方がましだよお！

語り手 あれあれ……まったく、どうすりゃいいんだ……

”マダム“が二人に気がついて、寄ってくる。

マダム どうしたの？——あら、杜子春。

杜子春 え？ あ！

マダム まあまあ、泣いてるの？ 可哀いそうに。誰が苛めたの？ こんない子を。

語り手 こいつつたら、また……

マダム お金？

語り手 ええ。ったくもう。

マダム そう、またなくしちゃったの。しょうがない子ねえ。大丈夫、心配しないで。私がなんとかしてあげる。

杜子春 ほ、ほんとですか!?

マダム ええ、可愛い杜子春の為だもの。

杜子春 や、やったあ！

マダム あのね、あその戸棚の上に、鍵が一つ載ってるわ。

その鍵を持って、今夜十二時、南口のトイレの横のロッカールームに行って、左から三列目、下から四段目のコインロッカーを開けてごらんさい、

そこに……

あたりふっと暗くなり、スポットライト。

の中に、語り手。

語り手 入っていたのは、印鑑と、中央区銀座四丁目の土地の登記書だった。それを担保に銀行から金を借りた杜子春は、あつという間に億万長者さ。ったく、ついてるねえ。

背後では再び、どんちゃん騒ぎが始まっている。

語り手 それからまた、連日連夜のどんちゃん騒ぎだ。

前よりももっとたくさんの人々が、杜子春の家に押しかけて、飲めよ、酒！ 歌え、カラオケ！ 女ときたら、よりどりみどりだ！

——しかし。

突然、土地の値段が暴落した。

金融機関は不良債券を山ほどかかえ込み、とんでもない不祥事が次々と明るみに出て、頭取の首がスポンスポンと飛んでゆく。こりゃ、たいした不況の始まりだぜ、おい、どうする、杜子春？……杜子春？

そこはあの安キャバレー。

がっくりとうなだれて、見るかげもない杜子春の他、誰もいない。

語り手、杜子春に駆け寄ろうとする。

すると、高い所から「マダム」の声。



マダム どうしたの？ 可愛い杜子春？

杜子春、力無く顔をあげて。

杜子春 もう何日も食べてないんです。泊まる場所もないんです。

マダム そう。それは可哀そうに。大丈夫、心配しないで。私が何とかしてあげる。

(右手に鍵を持って示しながら) ここに、鍵があるわ。

この鍵を持って、今夜十二時、東口のトイレの横の……

杜子春 いえ、お金はもう要らないです。

マダム お金は要らない？ まあ、どうして？

はーん、わかった。飽きたんだ、ついに。遊ぶのにも、贅沢するのも。

杜子春 別に、飽きちゃいません。ただ……人間てやつにつくづく愛想がつきたんだ。

マダム へえーっ、愛想がつきた？ また、何で？

杜子春 人間なんてみーんな薄情だ。俺が大金持ちになった時には、へいこらへいこら手を揉んだり、ひざまず跪いたりするけれど、金がなくなると知ったら、途端に態度ががらつと変わる。挨拶どころか、振り返りもしない。そのくせ陰ではザマーミロと指を指す。サイテーだよ。ひでえよ、ほんとに。

そう思ったら、たとえもう一度大金持ちになったところで、いいことなんか一つもないって気がして……

マダム まあまあ。ふふふ。

あなたってほんとにお利口さんね、杜子春。その若さでよくそこまで世間てものを理解したわね。感心、感心。

じゃ、これからは、貧しくてもいい、地道にコツコツやってくつもり？

杜子春 —— うーん……、それもなあ……今更なあ……。で、

俺、考えたんですけど、実は、お願いがあるんです。

マダム あら、何？

杜子春、いきなり大地に跪く

杜子春 一生のお願いです。どうか、私を、あなたの弟子にして下さい。いいえ、隠したってだめです。

いくら女装はしていても、その胸元からこぼれんばかりの気品、瞳に輝く叡智の煌めき。わかります。

あなたは、あなたこそは、世界経済を陰で動かす天才相場師、さもなければ、芥川龍之介の原作通りに、奇想天外な仙術使いだ。そうでしょう。

お願いします。この通りです。どうか、どうか私に、あなたを師匠と呼ばせて下さい。何でもします。どんな辛い修業にも耐えてみせます。だから……

”マダム“、後ろを向いてしばらく考えている。

そして振り返ったかと思うと、さきほどまでとはうってかわった低い男の声で。

マダムい仙人 如何にも私はそなたの言う通り、天才相場師、じゃなかった、峨眉山がびさんに棲すんでいる、鉄冠子てつかんしという名の仙人である。お前は骨のありそうな奴と見たから、二度まで大金持ちにしてやったのだが、それほどまでに仙人になりたければ、よかろう、わしの弟子にして遣つかわそう。

杜子春 おーし!! やったあ!!

杜子春、とびあがって、語り手と手を取り合い、喜ぶ。

杜子春 ありがとうございます。ありがとうございます。恩に着ます。

仙人 いやいや、礼を言うのはまだ早い。一人前の仙人になれるかどうかは、これからのお前の精進次第なんだから。

杜子春 はい。

仙人 ま、何はともあれ、まずわしと一緒に峨眉山の奥に来るがよい。ではゆくぞ。しっかりわしに連れて来い! シュワツチ!

杜子春 シュ、シュワツチ!?

二人、またたく間に去ってゆく。

語り手、その様子をあれよあれよと見送りながら。

語り手 杜子春！ がんばれよーっ！ 負けんじゃねえぞーっ！

二人、見えなくなる。

語り手、ほっと、息をつく。

舞台転換。

四基のスツールを四方に配置。階段は上手奥に。

語り手、霧囲気をかえて。

語り手 さて、こちらは峨眉山山頂の現場であります。さすがに高い岩山、夜も更けて、一段と冷え込んでまいりました。

あたりにはもちろん人影もありません。

曲がりくねった松の木が本、夜風にこうこうと鳴くばかり。

淋しい。実に、淋しい。こんな淋しいところで杜子春は、いったい……

仙人と杜子春、駆け込んで来る。

語り手 あ、見えました！ 杜子春です！ 我等が杜子春、ついに到着いたしましたあ！

四基のスツールに囲まれた場所に、杜子春、転がり込む。  
ひどく疲れて、息があがっている。よほどしんどい旅路だったのだろう。

杜子春 ああ、しんど……ああ、もう、駄目だ……

語り手 では、無事峨眉山に到着された杜子春さんに、さっそく、空の旅の御感想など、一言、伺ってみたいと思います。

杜子春さん、如何いかがですか、はじめて空をお飛びになってみて、今の御気分は？

杜子春 あ、は、はい、どうも。いや、なんつーか、この、えらいもんですわ、空を……

杜子春が話を続けようとするのを、仙人、制止する。

仙人 勝手に話しかけてもらっちゃ、困る。

この者は只今、修業中の身である。

あっち行け！ あっち！

語り手 は、はい……すみません……

仙人 いいか、杜子春、これしきのことと音をあげるようじゃ、到底仙人にはなれんぞ。ビシッとせんか！  
ビシッと！

杜子春、あわてて坐りなおす。

仙人 よーし！ よくきけ。わしはこれからちよつと所用で出かけてくる。その間お前はここに座って、わしの帰りを待て。

たぶん、わしがいなくなったら、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえばそんなことが起ろうとも、決して声を出すではないぞ。

もし一言でも口を利いたら、お前は絶対に仙人にはなれないものだど覚悟しろ。  
よいか、天地が裂けても、黙っているのだぞ。

杜子春 大丈夫です。絶対に喋りません。ひとつ言いません。何があつたつて、たとえ命がなくなつたつて、ひとつ言も！

仙人 そうか。それを聞いて、わしも安心した。では、わしは行く。再見。  
シュワツチ！

仙人、またたく間に去る。

語り手 そして、杜子春は一人ぼっち……

夜、更ける。

風の音。

杜子春、ひどく寒そうだが、姿勢を崩さない。

風の音、強まる。

音はまるで、誰かが泣いているように聞こえるほどだ。

杜子春、こらえている。

語り手 あれは魔性だ。魔性だ、杜子春。惑わされるな！

杜子春、おびえながらもうなずく。

風の音にまじって、雷鳴。耳をつんざくばかりに。

杜子春、ひれ伏す。

雨だ。激しい

杜子春は、びしょ濡れで震えている。

語り手 あれは魔性だ。魔性だ、杜子春。かどわかされるな！

杜子春、震えながらもうなずく。

と、思うまもなく、叱りつけるような太い声が、響きわたる。

声　こらあ！

杜子春、驚いてあたりを見回すが声の主の姿は見えない。

声　こらあ！　そんなところで何をしている！　何をしている！

杜子春、口をつぐんでいる！

声　答えろ！　何をしている！　答えないと、ずたずたに引き裂いてやる！

こらあ！　何故黙っている！　返事をしないか！　言え！　言わないと、こなごなにうちのめしてやる！  
語り手　あれは魔性だ。魔性だ、杜子春。絶対に答えるな！

杜子春、必死にうなづく。

声　こらあ！　何故返事をしない！　この強情者め！　どうしても言わないならば、約束通り、お前を地獄に突き落とす！

雷鳴と共に、激しい機銃掃射の音。



あたりは一瞬にして炎に包まれ、無数の悲鳴があがる。  
射ち抜かれたのは、杜子春だ。

語り手 杜子春!! ああっ!!

地獄。

めらめらと燃え立つ業火の中に、杜子春が倒れている。

傷つき、痛み、ようようのことで半身を起しかけた杜子春を、鬼たちがとり囲む。  
逃げ惑うのを提まえて、殴る、蹴る。縛りあげて、打ちのめす。

鬼1 言え!

鬼2 言わんか、こらあ!

鬼3 声を出せ! 声を!

鬼1 ざけんじゃねえよ!

鬼2 何、突っ張ってんだよ!

鬼3 言えよ! 言えよ!

語り手 (顔をおおい) ああ……

しかし、杜子春は歯をくいしばり、耐えている。

声 どうしても口を利かぬか。ならば考えがある。

こらあ、地獄の鬼共め、こやつ之母が畜生道に落ちているはずだから、即刻ここに引ッ立てて来い！  
鬼たち ははあっ！

鬼たち走り出て、杜子春之母親を引きずり出す。

声 こらあ！ その方は何の為に、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の母に痛い思いをさせてやるぞ。

杜子春、母の方を見ようとせず。

声 この不孝者めが！ その方は金に明かして暮らしていた時にも、貧しい母の行くすえすら確かめようとはしなかった。

この上更に、母がどんなに苦しもうとも、その方さえ都合が好ければいいと思っているのだな。

——打て！ 鬼！ 鬼共！ その畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ！

鬼たち ははあっ！

鬼たち、いっせいに母をうちのめす。

鬼たち　こらあ！　こらあ！

杜子春、見ないようにつとめている。

語り手　あれは魔性だ。魔性だ、杜子春。口を利いちゃいけない。口を利いたら、君は、君は、何もかも：

：

声　どうだ！　まだ白状しないか！

杜子春、耐えている。

母、息もたえだえとなりながら。

母　心配をおしてないよ、杜子春。私などどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。閻魔大王様が何とおっしゃっても、言いたくないことは黙っておいで。それで前が仕合せになれるのなら、母にとってこれより嬉しいことはないのだからね。杜子春、黙っておいで。誰が何と言おうと、きっと黙っておいで。

杜子春、母の声をきいて、思わず目をあける。  
そして。

杜子春 お母さん！

その途端に人々、消えている。そこは誰もいないキャバレーの……

杜子春にあたっているスポットライトを残して、あとは暗くなる。

杜子春、茫然としている。

作家が甲高い声で激しく笑いながら走り込む。

杜子春、去る。

作家 ——谷崎さん、それは違う。僕の言ってるのはそんなことじゃない。

僕が言いたいのは、話らしい話のない小説だって充分にありうるということだ。

いいかい、谷崎さん、重要なのは、詩的精神だ。

自由で、純粹で、火花の散るような時の精神。

それこそが小説の価値を定める唯一だと、僕は言いたい。

僕等はね、僕等は誰でも皆、出来ることしか出来ないんだ。そうだろう？

だから僕は、僕のやり方で、何と言われようと僕のやり方で、

まっすぐに、ただ、まっすぐに……

——やめてくれ！ やめてくれ！ レイン・コートなんか着るのは！

レイン・コートはいけない！ 不吉だ！

誰だ？ お前は誰だ？ やせて、骨組みばかりになった、いやに生白い、お前は誰だ？――

――ええ、わかってます。新年号。やりますよ、もちろんです。

いや少々、身体の方は弱ってますが、何てことはない。どうせいつもこの調子なんですから。

書きますよ。僕は、書いて書いて書きまくる。――実はね、ここだけの話なんだが、新しいものに挑戦してみようと思ってるんです。

いや、中味についてはちよいと教えられませんかね。

新しい、今までにないタイプの……

――（ひどくショックを受けたように）――いや、何でもありません。

何でも――犬！ 犬！ 犬！

――大丈夫……大丈夫です。ただちよつと――犬！ 犬はいけない！ 犬は嫌いだ！ あの鞞丸の薄

赤い色！ 冷たい色！

どかせ！ そいつをどかせ！ 今、すぐに！

伝令ーが走り込んで来る。

伝令ー 我々は闘う！ 生命を賭して闘う！

如何なる弾圧にも毅然として抵抗し、社会主義国家建設の為に、我等が文学の力を結集せよ！

打倒！ 日本帝国主義！ 打倒！ ブルジョア芸術至上主義！

連帯せよ！ 連帯せよ！ 人民はただちに連帯せよ！

作家 僕等は時代を超越することは出来ない。

のみならず 階級を超越することも出来ない。

けれどもね、僕等をしばりつけているのは、階級ばかりじゃない。

僕は、僕とは、もっと複雑な何かだ。複雑な、複雑な、何かだ。

その複雑さを見据えることからしか……

うらやましいよ。君等は烈しく生きている。

この、混乱した、暗い、暗い、時代の終わりを、烈しく生きている。

けれど、僕は……僕には……

伝令2が駆け込んでくる。

伝令2 だから、あの印税は、あいつがくすねたんだ。

でなけりや、あんな立派な書齋なんかたてられるはずがない。

「文芸読本」の編集だなんて言って、結局あいつは自分の売れているのをいいことに、仲間を裏切った。

けれど、あいつももう終わりだよ。

書けないんだよ。

見てごらん。あいつの書く物といったら、昔のような光がない。

ただ、理詰めいきちきちやってるだけだ。

時代は変わったんだよ。

何を言っても許された、花々の咲き乱れる時代は、あの大地震でつぶされた。だから、あいつはもう終わりだ。

作家——ちがう、……ちがう……なぜ僕が、この僕が印税のことなんか。何でそんな風に……

わかった。書けばいいんだね。書けば。書いてみせよう。みせようじゃないか。君たちが納得するものを。驚嘆するものを！

——痛い……痛い……頭が、胸が、身体が……痛い……誰か、薬を……薬を持って来てくれないか……

編集者、駆け込んで来る。

編集者——先生！ 先生！ しっかりして下さい！

ああ、もう！ どうしてこんなになるまで！

作家 書くから、絶対に書くから……幾つかもう、決めてあるんだ……だから……

編集者 いい、いい、もういい、書かなくていい。

少し休んで下さい。あんたには休息が必要だ。

ね、横になって！ 頼みます。この通り。後生ですから……

作家 書く……書かなくちゃ……横になんてなっていないか。なったところで眠れもしない。

編集者 駄目ですよ、そんな！無理だよ、あんた、疲れてる。

ものすごく疲れてる。ああ、どうすりゃいいんだ……

作家 大丈夫……大丈夫……だから、原稿用紙を、原稿用紙とペンを、持って来てくれないか。

編集者 いやだ、もういい、もう書かなくていい、先生、お願いです。横になって……

作家 原稿用紙！原稿用紙を！

編集者 ……ああ……

編集者、駆け出してゆく。

かわりに伝令3が。

伝令3 電報です！電報です！起きて下さい、大変です！

男が自殺したんです。

ええ、そうです、あなたの姉さんの夫で、自宅に放火した疑いのある。

鉄道です、今朝早く、鉄道に飛び込んだんです。

即死です。

すぐ来て下さい。

家の者は皆、混乱しています。

借金がみつかったんです。膨大な借金が。

だから火をつけたんです。やっぱり彼がつけたんです



もう何もかも目茶苦茶です。

姉さんは泣いている。

姉さんの子供も泣いている。

皆、泣いておろおろしている。

何とかして下さい。さ、早く。

早く来て下さい！

伝令たち、作家の背後で崩れてゆく。

作家 ……ああ……そう……わかった……何とかする……僕が行って、何とかするから……大丈夫……姉さん、落ち着いて……僕がついてる……火災保険……生命保険……高利貸し……

——わかってます。原稿は、必ず間に合わせる。僕は、度約束したことは、きちんと守る男だ。

校正刷りは、だから、どんなに遅くなってもいい。

家の方へ。必ず家の方に届けてくれ給え。

まだもう少し、手を入れたいから。どうしても、入れたいから。

——泣かないで。伯母さんも、皆、頼むから。……僕が全部、何とかする……警察に……まかせてくれたまえ……心配しないで……だから、もう泣くのはよして……静かにしていてくれないか……

——そうじゃない！ 谷崎さん、何度言ったらわかるんだ！ 僕はプロレタリア文学を否定しているわけじゃない。ただ作品としての価値は、その魂の純粹さによってのみはかられるべきだと言っているだ！

文芸はね、最も文芸的な文芸はね、僕等を静かにさせる。恍惚とさせる。

そのような恐ろしい魅力を持つ文芸を……僕は……僕は……

——動物的エネルギー！ 第一に動物的エネルギー！ 第二に動物的エネルギー！ 第三に動物的エネルギー！ 下さい、僕に！ 闘う力を、なおも闘い続ける力を、僕に下さい

——わかつている！ 僕が何とかするから、君たちは安心して……大丈夫……絶対に大丈夫……

——薬を！ 早く！ 誰か薬を！ 頭の中に変なもの……半透明の……まわっている……駄目だ……頭

が、痛い……止めてくれ……誰か……この歯車……ギザギザの……いくつも……いくつも……

作家の背後で医師と妻が話している。

医師 よくありませんなあ。体力が落ちている。

妻 食べないんです。食べられないんです。食べてもすぐに……

医師 神経が相当にまいつている、だから。

妻 眠れないんです。ほんの小さな物音も気になってすぐに起きてしまうんです。

主人が眠れずにいると思うと、私までも目が冴えて……

医師 奥さん、しっかりして下さい。ここはあなたがしっかりしないことには……

妻 ええ……ええ……

作家 ……動物的エネルギー！ ……動物的エネルギー！！

医師 出来ることなら、少し東京を離れて、奥さんと一緒にどこか静かなところへでも行ければいいんだ

が。

妻 それが……家の方も今、ひどくとり込んでおりました。

医師 ええ、存じてます。何故、こんな時にまた……

妻 主人より他にいないんです。我が家はあとは年寄りと、女、子供ばかりの所帯で。

それに……お金がいるんです。お金が。

医師 けれど、私の立場から言わせてもらえば、奥さん、彼には無理だ。今の彼の体力では。

妻 ええ……ええ……捨てられない人なんです。一人でこらえる人なんです。家も、家族も、仕事の上の辛

い悩みも、何もかも……

作家 ……動物的エネルギー！ ……動物的……エネルギー……

妻 臆病なわけじゃないんです。やさしい人なんです。やさしいけれど、とても弱い人なんです。

先生、私、心配でなりません。何がどうのというんじゃないんです。ただ、あの人心配で。心配で。

私はどうしたらよいのでしょうか。私に何が出来るでしょう。

医師 とりあえず、薬を少し変えてみましょう。前よりは幾分強い薬です。

これならたぶん、少しは眠れると思います。

ただ、気をつけて下さいよ。奥さん、気をつけて下さいよ。くれぐれも、目をはなさずに。

妻 ……ええ……ええ……

医師、去る

作家 ……の……は……だった……

伝令たち、脱兎の如く走る。  
妻、上手の階段に腰掛ける。

作家 ……の……は……母……は……だった……

女、駆け込んで来る。

兄弟、妻の側にうづくまる。

伝令、走り去る。

作家 ぼ……の、は、母……は……き……だった……

女、下手の壁にもたれて、作家を見つめている。

作家 ぼ……くの、は、母は……母……は……き……きようじ……だった……

ぼく……の、は、母は……狂人……だった……

僕の……母は……母は狂……人だった……

僕の母は……僕の母は……僕の母は、狂人……だった……

……狂人だった……僕の母……は狂人だった……

僕の母は、狂人だった……だった……僕の……母は……

小さな……土気色の……顔……たった一人、座りながら……やせ細った……

狂人……だった僕の母……は……僕の……

僕も……かもしれない……なるかもしれない……狂人……

に……なる……かもしれない……い、僕も

……僕も、母……のように……のような狂人……かもしれない……

……あ、まただ。また見える。まわっている……絶えず……半透明の……歯車、のようなもの。

ギザギザした……殖えてゆく……だんだん、数が……半透明の……歯車、のようなもの……

殖えて、殖えて、一つ、二つ、三つ、四つ、七つ、八つ、九つ

……塞いでしまう、僕の視野を……

(右目に手をあてて) 左目……何ともない。大丈夫。見えている。まだ、大丈夫……

(左目に手をあてて) 右目！ 駄目だ！ 見えない！ いっぱいの歯車！ まわる、まわる！

もうすぐ、もうすぐだ。痛みが……やって来る……頭の奥……身体の奥……の奥から……痛みが……や

ってくる……やって来る……

女 逃げましょう。逃げましょうか、一緒に……私と……

作家 逃げる？ どこへ？

女 どこへでも。行きたいところへ。あなたの……

上手の階段で、妻は、寝入ろうとする息子たちの髪を撫でている。

兄 お母さん、お父さんは？

妻 お仕事よ。だから、静かに。

作家 逃げる……？

弟 忙しいの？

妻 ええ。

弟 書いてるの？ 何、書いてるの？

女 捨ててしまえばいい。何もかも！

妻 小説。新しい小説。

作家 捨てる……？

兄 何、それ？

妻 きれいなもの。美しいもの。

作家 静かなところへ。

妻 こわいもの。悲しいもの。

女 やさしいところへ。

妻 大切なもの。

女 遠い、遠い、遠いところへ。

作家 ああ……そうだ……

弟 何で、書いてるの？

妻 さあ、何でだろう……

女 あなたはもう、充分に闘った。出来ることは皆、した。だから。

兄 わからないの？

作家 ああ……そうだ……僕は……僕には、出来ることしか出来ない。なのに……

弟 わからないのに、書いてるの？

作家 なのに、出来ないことをしなければ、生きてはいけない。

生き続けてはいけない。

僕は……。僕は、僕以外の者には、なれない。なれない……。

僕は、この、僕、のような僕としてしか、ありえない……とすれば……

兄 書いて、どうするの？

女 こわいの？

妻 御本にするの。御本にしてたくさんの人が読むの。

女 こわいの？

弟 読んで、どうなるの？ 役にたつの、それ？

作家 ——こわくはない。こわくはないよ。

女 ならば。

兄 たたないの？

作家 ン。

弟 たたないのに、書いてるの？

女 遠いところへ。

弟 お父さん、書いてるの？

女 誰もいない、静かなところへ。

作家 ン。

妻 生きる為に。生き続ける為に。

女 死にたがっていらっしやるのね。

兄 お金？

作家 どうすればいいのか、わからないんだ。

妻 ちがう。それだけじゃない。そうじゃない。魂。

女 死にたがっていらっしやるのでしよう。

弟 魂？

作家 ……いや、生きているのに、飽きたんだ。

女 私も。

妻 お父さんの魂には、必要なの。書くことが、必要なの。

女 ——プラトニック・スウィサイド。

作家 ——ダブル・プラトニック・スウィサイド。——後悔はしませんか？

妻 生きていくのに、必要なの。皆に、必要なの。魂に、必要なの。

きれいなもの。美しいもの。こわいもの。悲しいもの。雄々しいもの。いたいけなもの。狂おしいもの。



が、必要なの。

作家と女、どちらからともなく抱き合う。

妻、胸騒ぎを感じている。

女 ええ。あなたは？

兄 僕にも？

弟 僕等にも？

作家 ええ。

作家と女、抱き合ったまま、倒れてゆく。

妻 ええ。……あなた……あなた？

妻、作家の元に走り寄る。

作家の肩をつかんで、激しく揺さぶる。

作家、もうろうとしながら起き上がる。

女、背を向けて座っている。

妻 あなた！ あなた！ 何てことをするんですか！

こちらにも御家族というものがありませんよ！

それが、こんな風にして死んだりでもしたら、どんなに辛い思いをなさるか！

あなたという方は、何て自分勝手な！ 一人よがりな！

死のうだなんて！ しかも女の方を巻きぞえにして死のうだなんて！

なんて、弱いことを。情けないことを！

荷物を抱えた編集者、入って来ようとして、状況を知り、立ちすくむ。脇で見守る。

妻 ふざけるのもいい加減にして下さい！

そりゃ、あなたはどんなにお苦しいかしれません。

私なんぞ、まったく気がきかなくて、何の役にもたちやしないかしれません。

でも、でも、それならそれで、何でもおっしゃって下さればよろしいじゃありませんか！

話の相手にもなりやしませんか？

でしたらどうぞ、薬でも何でも飲んで、一人でお往きなさい。

あとのことは私が何とでもします。家のことも、子供たちのことも、いいようにしますから、あなたは何

の御心配もなさらずに、さっさとお往きなさい。

でも、往くのだったら、こんな情けないやり方は、しないで！ ねえ、しないで！

作家、床に頭をすりつけんばかりにうなだれて。

作家 ……すまなかった……すまなかったよ……すまなかった……

妻、客席を振り返り、静かな口調で。

妻 それは、重苦しい、嫌な、怒りでした。

後にも先にも、私が本当に怒ったのは、その時だけのようでした。

編集者、女、立ち去る。

波の音。

夏服の男が、階段に腰かけて、雑誌を読んでいる。

麦わら帽子を被った作家の背に、妻は手をそえて、並んで立っている。

二人の息子は、波打ち際にでもいるように。

兄 すごいね。すごい波だね、お父さん。

弟 嵐が来るよ。もうすぐ来るよ。ほら、光った。あそこ。稲妻だ。遠くに。

兄 あ、ほんとだ！ 見えたよ！ お父さん！

弟 来るよ。きつと来るよ。もうすぐだよ。

作家 あそこに、船が一つ。見えるかい？

妻 ええ。

作家 帆柱の二つに折れた船が……

兄 お父さあーん！

妻と息子たち、立ち去りかけて、静止。

作家 根をしっかりとろせ。

お前は葦だ。風に吹かれている葦だ。

空模様はいつ何時、変わるやもしれぬ。

唯、<sup>ただ</sup>しっかりと踏んばっている。

それは、お前自身の為だ。同時にまたお前の子供たちの為だ。

うぬ惚れるな。卑屈にもなるな。

これからお前はやり直すのだ。

弟 (弟としてでなく) 大正十五年、夏。

鶴沼海岸にて、夜、迫る。

作家、妻、息子たち、去る。

波の音。岩にあたって碎ける音。

夏服の男、雑誌を読んでいる。  
途中で顔をあげ、溜息をつく。  
それからまた、読み始める。

——暗転

## 5 地獄変

下手に高いスツール。

正面奥に階段。

中央に文机。

触れ太鼓と共に、きらびやかな衣をまとった、登場人物たちが入って来る。  
登場人物たちは客席に背を向けて、それぞれの場所に位置どる。

三人の公家たち、揃って向き直り、語り始める。

公家1 堀川の大殿様のような御方は、これまではもとより、後の世にもおそろく二人とはおじやりますまい。  
い。

公家2 御誕生の折りには、大威徳明王の御姿が、御母君の夢まくらにお立ちになったとか。

公家 とにかくお生まれつきからして、並みの人とは大違い。

公家1 その徳の高きこと。

公家2 豪放にして磊落な御性質。

公家3 ならぶものとなき権勢、栄華を誇り。

公家1 百鬼夜行、夜な夜な現われる、あの源の左大臣の靈さえも、殿の御前にては、ひれ伏したとか申さうぞ。

公家2 なのに少しも驕れることなく、下々にまで心を配られ。

公家3 いわば天下と共に楽しむおとでも申さうよう、大腹中の御器量をお持ちでおじやりました。

公家1 されば、大殿様御一代の間には、後々までも語り草になるような出来事が、あれもこれもと。

公家2 そうそう、ほれ、大餐の引出物に白馬ばかりを三十頭、賜ったことも。

公家3 長良の橋の橋柱に御寵愛の童をお立てになったことも。

公家1 それから、ほれ、華陀の術を伝えた震旦の僧に、御腿の瘡をお切らせになったことまで。

公家2 数えあげればきりもない。

公家3 されど、中でもあの地獄変の屏風の由来ほど、恐ろしい話はおじやりますまい。

公家1 おじやるまいぞ。

公家2 おじやるまい。

公家3 日頃は物にお騒ぎにならない大殿様でさえ、あの時ばかりはさすがにお驚きになられた御様子。

大殿、ゆっくりと振り向く。

公家2 ましておそばの私共は、魂も消ゆるばかりに。

公家1 ああ、それはそれはすさまじい……今でも眼前に浮かんで来るようじゃ……

公家3 あの、烈々とした火焰の色。

公家2 業火に焼かれて苦しむ罪人、亡者の群れ。

公家1 怪鳥の嘴、毒竜の顎。  
けちようくちばし あぎと

公家3 中でもあの、中空なかぞらから落ちて来る一輛の牛車の絵柄は。

公家1・2 おお……

公家3 地獄の風に吹き上げられて燃えすさぶ、その車のすだれの中には、綺羅びやかに装った女房が、丈の黒髪を炎の中におんおんとなびかせて、雪のように白い頸うなじをそらせながら、もだえ苦しむ。

公家1、2、眉をしかめて顔をそむける。

公家3 炎熱地獄の責苦とはかようにむごきものかと、その阿鼻叫喚の耳に迫りて今も離れぬ……

あれでおじやりまする。あれを描く為にあの恐しい出来事が起ったのでおじやりまする。

さもなければ、如何に良秀、あの本朝第一の絵師良秀でも、どうしてかように生き生きと奈落の苦艱くげんが描かれましようぞ。

大殿、ゆっくりと背を向ける。

かわって、文机に背を向けていた良秀が向き直る。前方をはたと見据える。

公家3 けれど絵図を仕上げた代わりに、あの男、命さえも捨てるような、無惨な目に会ってしもうた。

公家1・2 ああ……

公家3 いわばあの絵の地獄は、良秀が、自分でいつかおちて行く地獄だったのではありますまいか……

公家1 おそろしや……

公家2 あな、おそろしや、地獄変の屏風絵図……

公家3 そのおそろしき屏風絵図の物語をば、いざ、

公家たち 始めましょうぞ。

### 太鼓の音。

公家 ———— まずは、その良秀という男。

良秀 ふん。

公家1 卑しい男でおじやりました。醜い男でおじやりました。

吝嗇で、慳貪<sup>けんどん</sup>で、恥知らずで、強欲で。猿のような男でおじやりました。

良秀 うぬら、かいなでの絵師共に、美醜の区別などわかるうものか。この天下第一の絵師良秀が、美しい

と言うものが美しい。醜いと言うたら醜い。右と言えば右、左と言えば左。

わしの絵が千金に値するも、それ故じゃ。ただわし一人が、まことの美醜を知る故じゃ。

公家1 確かに良秀が絵は、他とは違っておじやりました。彩色も、題材もまるで違っておじやりました。



他の絵師が梅の花、大宮人の笛の吹く絵を描いたらば、やれ月の夜ごとに匂うたの、笛の音がきこえたのと、優美な噂がたちましたものを、良秀が絵になりますと、すすり泣きかきこえたの、死人の臭気をかいたのと、気味の悪い、妙な話ばかりでおじやります。それというのも。

良秀 吉祥天を描くの、卑しい傀儡くわいの顔を写して何が悪い。

檜垣ひがきの巫女に狐が憑いたを写したも、あのもの狂いの表情が不動明王の怒りの顔と見えたからじゃ。わしは見たものでなければ描けぬ。

見て、これぞまことと思うたからに、そう描いたまでじゃ。何が悪い。わしの絵のどこが悪い。

公家3 さようでおじやります。この猿のような男には、世間の習慣も慣例も、とんと眼中になかったの  
でおじやります。

とにかく一に絵、二に絵。天下に自分の描く絵ほど素晴らしいものはないと言うてはばからず、事実、良秀の絵はそれはそれは一度見たら心にとりついて離れぬほど、人の目を魅きつけたのでおじやります。ああ、けれど、その高慢限りない良秀にも、一つ、たった一つ、人間らしい、情愛のあるところがおじやりました。

公家2 娘でおじやります。良秀には娘が人あったのでおじやります。

娘、振り返る。

大殿も、振り返る。

良秀の、表情、やわらかくきりかわる。

公家2 この娘、親には似ても似つかない、やさしい娘でおじやりました。目のほど涼しく、思いやり深く、何かとよく気のつく娘でおじやりました。

良秀は、この一人娘をまるで気違いのようにかわいがり。

良秀、かたわらに娘を引き寄せ、

良秀 ああ、言うてみよ。何が欲しい？ 髪飾りか？ 着る物か？ 帯は要らぬか、新しい帯は？ ん？  
何なりと言うてみよ。買うてやる。わしが買うてやる。ん？

娘ははにかむようにうつむいて、かぶりを振る。

良秀 遠慮は要らぬ。わしは買うてやりたいのじゃ。かわゆいお前の喜ぶ様が見たいのじゃ。ん？

公家2 あの強欲者が、娘にだけは金銭に惜し気もなく、何から何まで整えてやったのでおじやります。

そればかりか、

良秀 嫁になどは行くな。勤めもするな。いつまでも、いついつまでも、わしが側におってくれ。な、約束せい。

娘、小さくうなづく。

良秀 おーし、良い子じゃ。かわゆい子じゃ。お前は天下のわしの娘じゃ。買うてやる。何なりと買うてやるぞよ。

公家2 言い寄るものでもおじやりましたら、暗討やみうちちくらいはくわせかねない、それはそれは異常な異常なかわいがりよう。  
ところが。

公家3 ところが、その美しい娘の噂がどこからどこへと伝わったものか、大殿様の御耳に入り、小女房としてお召しかかえになるとの御使者が。

良秀 なんと！

使者が娘を連れて行こうとする。

良秀と使者、もみあいになる。

使者、良秀をつき放す。

使者 ひかえい！ 大殿様の御命令を何とこころえる！ 絵師ふぜいが！ 無礼者！ 有難くお受けいたさぬか！ さぬか！

使者、後ろを振り返り、振り返りする娘を、連れて去る。

良秀、机をたたいて悔しがる。

良秀　なんと！

公家―　思えばあれが始まりでおじやりました。

あのおそろしい出来事の始まりでおじやりました。

太鼓の音。

殿の御前。

大殿　良秀。このたび、その方の描きたる稚児文珠が絵、見事な出来映えであった。

良秀　ははあ。有難きお言葉に存じます。

大殿　さすが本朝第一と評判の腕じゃ。余は満足いたしておる。

ついては、そちに褒美をとらせる。何なりと遠慮のう、望むがよいぞ。

良秀　ははあ。では、お言葉に甘えまして、良秀が望みを申し上げます。

なにとぞ、なにとぞ、私の娘をばお下げ下さいますように。

公家たち、色を成す。

大殿の家来が立ち上り。

家来　よりによって何を申す！　良秀、ぶしつけがすぎるぞ！

ひかえい！　ひかえい！

良秀 お願いでございます。どうか娘を、娘をば私にお返し下さいませ。

良秀、大殿をにらみつけるように。

家来 良秀！

良秀 大殿様！

大殿 ——（強い調子で）それはならぬ。

良秀 何ゆえでございまするか。大殿は只今、望みの物を申せとおっしゃったではございませぬか。ならば、ならば！

大殿 ならぬ。（後ろを向いてしまう）

良秀 大殿様！

家来 ひかえい！ ひかえい！

娘、大殿の側近くで、顔をおおっている。

公家3 かようなことが幾度おじやりましたか。

今になって思えば、大殿様の良秀を御覧になる眼は、それにつれ、だんだんと冷やかになっていかれたようでおじやります。

そこで広がったのが、あの噂。

公家1・2 おう。

公家3 大殿様は、良秀が娘に色を好んで、懸想なすっておじやるという。

公家2 まさか。

公家1 けれども。

公家3 いや、たぶん。

公家たち、顔を見合わせ、口をおおう。

公家1 は、ともかく、そんな折でおじやりました。

どう思し召したか、大殿様は突然良秀をお召しになって、地獄変の屏風を描くようにと、お言いつけなされたのでおじやりまする。

良秀の画房。薄暗い中で。

文机の上に白い紙を広げて。

良秀はその前に座ったり、立って歩いたり、うなり声をあげたり。

机の横で、弟子が絵の具を調合している。

良秀 ううむ。ううむ。

弟子 お師匠様、お師匠様、もう大分運うございますから、このへんで今宵はお休みになられては？

良秀 うるさい。お前がいらん口をはさむから、せつかくの考えが飛んでしもうたわ。ええい！

お前は黙って絵の具を練っておればよいのじゃ。このろくでなしめが。

弟子 あ、こ、これは申し訳もございません。

良秀 …ううむ。地獄…地獄じゃと…地獄…なぜ描けぬ。なぜわしに地獄ごときが思い浮かばぬ。…  
…そうじゃ、鎖じゃ。鎖を持て！ 何をしておる持てと言うたがきこえぬか！ 鎖じゃ、鎖じゃ！  
弟子 は、はあ！ 只今！

弟子は鎖をとり走る。

良秀 まだか！ 早うせいと言うておるのがわからぬか！

弟子 (鎖を持ってきて) は、はい、これに。

良秀 よし、そこへなおれ。

弟子 はい。

良秀 もそつと顔をこっちへ向けんか！

弟子 は、はい。こうでございますか？

良秀 もそつと！

弟子 は、はい！

良秀、いきなり弟子に鎖をかける。

弟子 お師匠様、何をなさいます！ おやめ下されませ！ どうか！ ああ、痛い！ お師匠様！ お師匠様！

良秀 黙れ！ 黙れ！ 絵の為じゃ！ 絵の為じゃ！

弟子 ああ！ 死んでしまいます！ おやめ下されませ！

良秀 （かけ終えて） よし、これでいい。

弟子 お師匠様、後生でございます！ どうか、お助け下されませ！ 命だけはお助けを！

良秀 そうじゃ！ その顔じゃ！ 命乞いをする顔じゃ！ 地獄の顔じゃ！ まことの姿じゃ！

弟子 お師匠様！ お師匠様！

良秀 わめけ！ もっとわめきたてろ！

良秀、 絵筆をとって、弟子の周囲をうろつきながら、次々と筆を走らせてゆく。

弟子、 その体勢のまま。

弟子 鎖ばかりではございません。ある時は蛇をけしかけられ、またある時は、耳のように羽のつき出た

耳木みみぎ兎とか申す異様な鳥に追いまわされ、もう、生きた心地もいたしませなんだ。

もとより、お師匠様という方は、一たび仕事にかかりますと、ああ、まるで物怪もののけでも憑いたようになるの  
でございます。



良秀 ちがう！ ちがう！ もっと上を向かんか、上を！

弟子 昼も夜も一間に閉じこもったきり、めったに日の目も見ない。かと思えば、往来に駆け行って行って、打ち捨てられた死骸の前に腰をおろし、半ば腐れかかった顔や手足を、髪の毛一本たがえずに、写して参ったりいたします。

とにかく、その夢中になりようといったら、尋常ではございません。

良秀 よし！ 今度はこちらじゃ！

弟子 ことにあの地獄変の屏風の折には、怪しげなお振舞いの、一層にはなはだしく、私共、弟子一門の者は皆、虎と、狼と、一つ檻にでもいるような心持ち。

出来ることなら、お師匠様の身のまわりへは、近づくまいと…… 近づくまいと……

良秀 もうよい。(鎖をほどいてやりながら)

終わった。下がれ！ 下がれ！

弟子 は、はい。ありがとうございます。ありがとうございます……

良秀 とっとと失せぬか！

弟子 は、はい……………

弟子、走り去る。

良秀、描いた紙をためつすがめつしながら。

良秀 ううむ。ううむ。

良秀、悩んでいる。

良秀 うおう！

紙をつかんで片端から握りつぶし、投げ捨てる。

また、あたりをうろうろと歩き始める。

公家2 けれど、なかなかにはかどりませぬ。

なかなか、なかなか、はかどりませぬ。

秋から冬、そして冬の末になっても、いっこうに仕上がる気配もおじやりませぬ。

何ごとか、どうにも自由にならぬがあるかとみえて、良秀は八分通りに出来た下画を前に、より一層陰気な顔つき。

公家3 物言いも、目に見えて荒々しく。

公家1 いや、人のいないところでは、あの強情な老翁おやじが、ひとりで子供のように泣いていたとか。

公家2 ほんに？

公家1 ほんに。あ、ほんに。

良秀、机、画材を持って去る。

かわって娘がうつむきがちに歩み出る。

公家3 一方こちらは、良秀が娘。

娘の方も、何故かは知らねど、目に見えて気鬱な様子。

元来の愁顔うれいがおに、涙をこらえている様は、余計に寂し気。余計に哀れ。

公家2 あれは、父を思っているせいじゃ。

公家1 いやいや、あれは、あの表情は、恋煩いに決もうておじやる。

公家2 恋煩いとな。して、相手は誰じゃ。

公家3 それがのう……

公家1・2 ん？

公家3 大殿様が御意に従わせようとしておじやるのだとの、もっぱらの。

公家2 大殿様が？

公家3 しっ！！

公家2 まさか！

公家1 けれども。

公家3 いや、たぶん。

娘の姿、消えている。

公家3 実は、かようなことがおじやりました。

公家一、公家三の語りにあわせて動く。

公家三 さる夜も更けた頃、御殿の廊下を一人、通うておりました時のことでおじやりまする。

あたりはどこもしんと静まり帰って、夜目にも白いお池の水が、枝ぶりのやさしい松の向こうに見渡せるばかり。

と、その時、どこか近くの部屋で、人の争うらしい気配がいた如ししまする。

あわただしく、けれど妙にひっそりとした、その気配。

思わず立ち止まって、もし狼藉者でもあったなら、目にももの見せてくれようと。

娘が、物陰から走り出る。

娘の衣装も、髪形もひどく乱れている。

娘、公家とぶつかりそうになる。

娘は！

公家 あっ！

娘 申し訳もござりませぬ。申し訳もござりませぬ。

物陰から、何者かが、あわただしく立ち去る物音。

公家一、物音の方向を見やり。

公家一 誰じゃ？

娘は激しくかぶりを振りながら、衣装の胸元をかきあわせている。

公家一 誰じゃ？ 如何いたした？

娘 何でもござりませぬ。何でもござりませぬ。

公家 と、申しても……

娘 お許し下されませ。どうぞ、お許し下されませ。

公家一 私は誰にも何も申さぬ。もし何か気に病むことあらば、話しておじゃれ。力になろうぞ。

娘 ありがとうございます。けれど、ほんに、何事もござりませぬ故、お許し下されませ。ほんに、ほんに。

公家一 ……さようか。ならばよいが。……ではもう夜も更けた故、お曹司<sup>ぞうし</sup>へお戻りなされ。

娘はい。ありがとうございます。ありがとうございます。

娘、走り去る。

公家一、物音のした方角を気にしながら、娘を見送る。

公家3 これがあのだ、慎しやかな娘かと思うほどの、なまめかしさ、つややかさ。

眼は大きく輝き、頬は燃え、そこへあのしどけなく乱れた袴うちぎや袴。

なぜか問い質ただすのが悪いような心持ちがいたしました。

わかりすぎるほどわかっていることその他、何一つきいてはならぬような。

あれは、あの人の立ち去る気配の主は。

公家2 まさか！

公家1 けれども。

公家3 いや、たぶん……そして、その半月後。

太鼓の音。

スツールの上に大殿。その下に家来。

その前に良秀と、弟子が、かしこまって座っている。

良秀 かねがねお言いつけの地獄変の屏風でございしますが、私も日夜に丹誠を抜きんでて筆を執りました

甲斐がようように見えまして、もはやあらまは出来上がったも同然でございします。

大殿 それはめでたい。余も満足じゃ。

良秀 いえ、それがいっこうめでたくはございませぬ。

あらまは出来ましたが、ただ一つ、今もって私には描けぬ所がございします。

大殿 なに、描けぬ所とな。

良秀 さようでございませぬ。私は総じて、見たものでなければ描けませぬ。よしんば描けても、得心が参りませぬ。私は先年、大火事がございました折に、炎熱地獄の猛火にもまごう火の手を、眼のあたりにながめて、写しました。

あるいは罪人、鉄の鎖くろがねにしばられたもの、怪鳥に悩まされるものの姿も、写しました。ですから、そのようなものが描けぬのではございませぬ。

大殿 では何が、何が描けぬと申すのじゃ。

良秀 私は、屏風のただ中に、檳榔毛びろうげの牛車が一輛、空から落ちて来るところを描こうと思っております。

その車の中には、あてやかな上臈じょうろうが一人、猛火に黒髪を乱しながら、もだえ苦しんでいるのでございませぬ。

煙におせび、眉をひそめ、手はすだれを引きちぎって、降りかかる火の粉の雨を防ごうとしているやもしれませぬ。

そうしてそのまわりには、怪鳥の群れが、十羽、二十羽、嘴を鳴らして紛々と飛びめぐっているのぞいでございませぬ。

—— ああ、それが、その上臈が、どうしても描けませぬ。……描けませぬ。

大殿 そうして、どうじゃ？

良秀 どうか檳榔毛の車を一輛、私の見ている前で、火をかけていただきとうございませぬ。そうしてもしできませんならば……

一同、息を呑んだように静止。

大殿、激しく笑って。

大殿 おお、万事その方が申す通りにいたして遣わそう。

地獄変の屏風を描こうとすれば、まことの地獄を見ずにおかれぬ、その方の考え、よくわかった。  
できるできぬの詮議は無益むやくの沙汰じゃ。

車に火をかけよう。

またその中にはあでやかな女を人、乗せて遣わそう。

炎と黒煙とに攻められて、車の中の女がもたえ死ぬ——それを描こうと思いついたは、さすがに天下第一の  
絵師良秀じゃ。

ほめてとらす。おお、ほめてとらすぞ。

大殿、激しく笑う。

公家たち、眉をひそめてささやきかわす。

良秀は、体中の力が抜けたようになり、倒れ込む。  
それを弟子が助けおこす。

弟子 お師匠様！ お師匠様！

良秀 ……あ……ありがたき……しあわせに……ございまする。



太鼓の音。

公家1 明けて、次の、また次の日の夜。

公家2 ところは洛外、ゆきげ雪解の御所。

公家3 月のない夜に、たいまつ松明かざして。

家来 大殿様のおなりい。

太鼓の音、一段と大きく。

一同、ひれ伏す。

大殿 良秀。

良秀 ……はい。

大殿—今宵はそのほうの望み通り、車に火をかけて遣わそう。

大殿、家来を見やる。

目配せでもするよう。

二人、意味ありげな微笑。

奥の扉のところすだれ。その前に大きな車輪がとりつけてある。

大殿 よう見い。それは余が日頃乗る車じゃ。

そのほうも覚えがあらう。

余は、この車にこれから火をかけ、眼のあたりに炎熱地獄を現ぜさせるつもりじゃ。中には女が人、縛いましめたまま乗せてある。

されば車に火をかけたなら、必定その女めは、四苦八苦の最期を遂げるであらう。そのほうが屏風を仕上げるには、またとない手本じゃ。

雪のような肌が燃ゆるを見のがすな。

黒髪が火の粉となって、舞い上がるさま、よくぞ見ておけ。

良秀 ははあ。

大殿 まことにこれは、末代までもない観物じゃ。余もここで、とくと見物しよう。それぞれ、すだれを揚げて、良秀に中の女を見せて遣わさぬか。

家来 ははあ。

家来、立ち上がって、すだれを揚げる。

中には、綺羅びやかに飾った娘が、縛いましられている。

公家たち・弟子 ああっ!!

良秀、驚きのあまり、声も出ない。

公家2 あ、あれは、良秀が娘！  
公家1・3 な、なんと！

良秀、手を伸ばして車に走り寄ろうとする。  
弟子があわててひきとめる。

弟子 お師匠様！  
良秀 お、おお……

その様子に、大殿、高く笑う。  
良秀、顔をおおっている。

公家3 ああ、その時ほど、大殿様が大きく、大きく、更に大きく思えたことは、  
公家1 良秀が、小さく、小さく、それは小さく思えたことは、  
公家2 哀れに思えたことは、  
公家たち おじやりませぬ。おじやりませぬ。  
公家3 その時ほど……

大殿、立ち上り。

大殿 火をかけい！  
家来 ははあ！

良秀、弟子を振り切って飛び出す。  
その途端に、車は音をたてて燃えあがる。

良秀 ああう……う……

車輪ががらがらと回り始める。

娘はもだえている。

良秀は正気を失ってその前に立ちすくむ。

弟子がひきもどす。

大殿の高笑い。

大殿 地獄じゃ、良秀！ そなたの望んだ、まことの地獄じゃ！  
何をしている！ 絵筆をとらぬか！ とらぬか、良秀！  
はやくしないと、燃えつきようぞ！

弟子が良秀に紙と絵筆を持たせる。

良秀、絵筆をとり落とし、うずくまってしまふ。

大殿 良秀！ 何故描かぬ！ 何故描けぬ！ それでもそなたは、天下第一の絵師なるぞ！ 何をしている！ はやく！ はやく絵筆を！

良秀、絵筆を持つとうとするが持てず、激しくかぶりを振っている。  
作家、走り込む。

作家 描け！ 描くんだ、良秀！ 絵筆をとれ！ とるんだ、良秀！

大殿、高く笑う。

公家たち、弟子、家来、炎にあおられ。

娘、いっそもだえて。

作家、良秀に走り寄り。

作家 (絵筆を持たせて) 持て！ 持つんだ、しっかりと、お前の絵筆を！  
がっと思を開け！ 見つめろ！ 地獄を！ お前の地獄を！

もっとしっかり!

大殿 描け、良秀!

作家 描け、良秀! 逃げるな! 闘え! 絵師ならば、本物の絵師ならば!

良秀の表情、変わり始める。

輝きを帯び、微笑すら浮かんで。

しっかりと絵筆を持ち、くいているように炎を見つめている。

大殿、わなわなと震えている。

良秀、おごそかな表情で、絵筆を走らせ始める。

大殿 ——良秀……

作家 そうだ、良秀。それでこそ。

描け! 描き進め! この世の地獄を、お前の絵筆で、描いて、描いて、描いて……

良秀 うおおう!

作家 歓びを。描くことの、ただ一筋の歓びを。

そこにはもはや、天もなく、地もなく、生活も、地響きたてる時代の轍の跡もなく、ただ、野蛮な歓びのみがある。

恍惚と、法悦と、随喜の涙と、ペンのみがある。

歓びを。書くことの、ただ一筋の歓びを。

ひときわ高く炎はあがり、激しいどよめきと共にすべては焼き崩れ。

——暗闇が。静けさが。

良秀と、作家は、折り重なるように倒れている。

他の人々も倒れている。

公家一のみ、そこから半身をおこし。

公家一 良秀は、描き上げましておじやりまする。

ああ、地獄変の屏風絵図。

それはそれは、たいした出来映えでおじやりました。

日頃、良秀をことその他悪く言う者も、その屏風の前に立つと、不思議におごそかな心持ちに打たれて、口をつぐんでおじやりました。

あの、堀川の大殿様ですら。

けれど……

けれどそうだった時分には、良秀はもう、この世にない人の数に入っておじやりました。

一人娘を先立てた、あの男、生きながらえるのに堪えなかったか、屏風の出来た次の夜に、自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死ん……

公家一、ゆっくりと顔を伏せる。

6 或阿呆の一生

あたり、ほんのりと明るくなる。  
夜が、明けかかっている。

編集者が、目覚める。

夏。

熱帯夜の火照りがすつと引くように。

眠気を振り払い、混乱の跡を残した周囲に目をやり、それから、未だ眠りの中にある作家の側へ。

編集者 ……よく眠ってるよ、珍しい。今度の薬は、ちったあマシのようだね。よかった。よかった。

…あれあれ、こんなに眉間に皺寄せて。いったい、どんな夢、見てるんだか、可哀そうに。

何でこうなっちゃうのかね、あんたって人は。ねえ、先生。

——十年。十年か。もうそんなになるんですかね。十年……あんたも俺も、無我夢中で走って、走って、走って……俺はもう、あんたの背中から振り落とされまいと、毎日毎日そればかり。なにしろあんたというお方は、ケツに火でもついたみたいに、無暗矢鱈むやみやたらにぶつとばすときたもんだ。

——でもね、俺はね、俺は後悔なんかしてやしない。後悔なんか……。ほんとですよ。それどころか…。



——ねえ、先生、覚えてますかい、俺が初めてあんたにとりついた、あの強い風の吹く日のことを。  
あんた、あの頃、まだ学生だった。詰襟の黒い制服姿で、頭は丸刈り。涼しい眼をして、窓から外を眺めてた。

風にね、風にバタバタあおられて、樹がね、たわわな緑がのけぞるように、騒いでる。

細い枝が激しくしなり、木の葉が、木の葉の一つ一つが、皆、違う表情で、はためく、きらめく、裏返る。そりやもう、見てるだけで息が苦しくなるくらい、すさまじくきれいな見世物だった。

神の創り給うた世界の、一等上出来の一瞬だった。

ああ、あれを書きたいと、あのように書きたいと、一生を賭しても書くことを仕事にしたいと、あんたは思った。あの時、痛いほど強く思った。

俺は嬉しかったね。見つかったよ。やっと見つけた。こいつだ。

俺がずうっと探していたやつは。書くことの本当の歓びを知るやつは。よし、決めた。こいつの中に棲み込んで、書きたいだけ書かせてやろう。きれいなもの、こわいもの、悲しいもの、雄々しいもの、いたいけなもの、狂おしいもの、のありったけを、書かせてやろう。俺はすぐさま、あんたの心にとりついた。あんたの心の鬼になった。書く鬼、我が鬼、我鬼になった。

——あれから十年。あんたと俺の二人三脚。楽じゃなかった。

けど面白かったよ。退屈する暇なんか、これっぽっちもありませんでした。天国から地獄まで、いい夢も悪い夢も、短い間にいやというほど見せてもらった。

——思い出すねえ。中でも、ほら、俺が一等、幸せだったあの朝を。作家志望の学生仲間と作った雑を、あんた、当代の一の文豪の、あの「我が輩は猫……」の先生に送ったろ。

まさか来るとは思ってた返事が来たのは、そのすぐあとだ。

「大変面白いと思います。材料の新しさ、よく整った文章、敬服しました。こういうものをこれから二、三十並べてごらん下さい。文壇で類のない作家になれます、きっと。ずんずん先へお進みなさい。ずんずん、ずんずん……。」

背後の人々ゆっくりとおきあがり、場面転換をはじめ。

劇の終わりのように。時代の終わりのように。綺羅びやかなものは片付けられ、整然と、端然と、襟を正して。

編集者 最高のほめ言葉が並んでた。

おい、どうする、やったぜ。チキショー。万歳！ 万歳！ 万歳！ 万歳！

その手紙を懐ろに入れて、俺たちや、肩組んで、街ん中を一晩中、歩いた、歩いた。

ヤッホー！ うっすらと東の空が白みはじめて、人も車も並木もビルも、薔薇色に染まってく。空には、薄紫のやさしい空には、ちょうど真上のところに、星まで一つ、輝きやがる。

嬉しかったよ。嬉しかった。ああ、ほんとうに……。

——でも、その大切な猫の先生も、あれから十月とたたない内に、一人でさっさとあの世におでまし。こちとら、無惨なおいてけぼりときたもんだ。

いやはや、まったく、何てこったい。

それからというものは……

——大きな大きな大きな力が、深い暗い地の底で、ゆっくりとうごめき始めた。

得体の知れない、その、とてつもなく強い力は、やがて地表を切り裂いて、破壊に向かって走り始める

〈歌うな！ 黙れ！〉

〈休むな！ 走れ！〉

何だ？ 何が起きたんだ？ わかんねえ。でも、壊れてく。がらがらと、がらがらと。

〈終わったんだよ〉——何が、終わった？

〈始まるんだよ〉——何が、始まる？

いったいどこへ？ どこへ連れていかれるんだ、俺たちは？

見えない。何も見えない。なのに、聞こえる、音だけが。

低い低い地鳴りのような物音が、確かに今、俺のこの、情けねえ棒切れみたいな足の下で、吠えている。

〈始まるんだよ。新たな枠組み、奇怪な論理、誰も考えつかないような、激しい時代が〉

冗談じゃない！ よしてくれ！ 放つといてくれ！ 俺にかまうな！

〈そうはいかない〉

歯車だ！ 歯車が回っているんだ！ 巨大な巨大な歯車が、今、この下で！

なのに、先生、あなたは立ち続けた。それでも立って、歩こうとした。

前へ、前へと瓦礫の山の中を、刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。

もういいよ、いいよ、先生。少し休もう。俺が許す。全面的に許すから、少し休んで、体力つけて、それ

から歩こう。また、書き始めよう。

ついてゆくから、俺、どこまでも、ついてゆくから。

でも、今は、今は、危ない。見ちゃいらんない。だから、先生……先生……！

編集者、文机の上に、原稿用紙の束を発見する。

手にとって読む。

読みながら、顔色が変わってゆく。

背後の人々、それぞれの定位置について、語る。それぞれの役柄としてでなく。

1 誰もまだ自殺者自身の真理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や、あるいは彼自身に対する心理的興味の不足によるものである。

僕は君に送る最後の手紙の中に、はっきりこの心理を伝えたいと思っている。

編集者 ……これは……！

2 彼は、小説を書き上げたのち、偶然ある古道具屋の店に剥製の白鳥のあるのを見つけた。

1 君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、あるいはまた精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであろう。

2 それは頸を挙げて立っていたものの、黄ばんだ羽根さえ虫に食われていた。

彼は彼の一生を思い、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。

1 ———しかし、僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。

のみならず、たいていは、動機に至る道程を示しているだけである。

- 3 示しているだけである。それは我々の行為するように複雑な動機を含んでいる。
- 2 彼の前にあるものはただ発狂か自殺かだけだった。彼は日の暮れの往来をたった一人歩きながら、おもむろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。
- 4 人生は一行のボオドレエルにも若しかない……
- 3 が、少なくとも僕の場合はただほんやりした不安である。
- 1・3 何か僕の将来に対するただ  
ほんやりした不安である。
- 編集者 ……なんてこった……!
- 5 彼の友だちの一人は発狂した。
- 「君や僕は悪鬼につかれているんだね。世紀末の悪鬼というやつにねえ。」
- 3 僕の今住んでいるのは氷のように透すみ渡った、病的な神経の世界である。
- 1 — 氷のように透み渡った、病的な
- 1・3 神経の世界である。
- 4 彼はいつ死んでも悔いないように烈しい生活をするつもりだった。が、
- 5 世紀末の悪鬼というやつにねえ。
- 1 僕はゆうべある売笑婦といっしょに彼女の賃金の話をし、しみじみ「生きるために生きている」我々の哀れさを感じた。
- 4 が、相変わらず遠慮がちな生活をつづけていた。道化人形……
- 1 — もしみずから甘んじて永久の眠りにはいることができれば、我々自身のために幸福でないまでも

平和であるには違いない。

編集者 ……ああ……

6 しかしどういふ闘いも肉体的に彼には不可能だった。彼はペンを執る手も震え出した。

3 平和であるには違いない。ただ自然はこういう僕にはいつもよりもいっそう美しい。

6 のみならず涎よだれさえ流れ出した。

3 君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう。けれども、

6 彼の頭は〇・八のヴェロナアル

2 ヴェロナアル

4 ヴェロナアル

6 ヴェロナアルを用いて覚めたのちのほかは一度もはっきりしたことはなかった。

3 けれども自然の美しいのは僕の末期の眼に映るからである。

6 彼はただ薄暗い中にその日暮らしの生活ヴァイをしていた。

5 紫の火花、火花のような生

3 僕は他人よりも見、愛し、かつまた理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には満足である。

全員 最後に僕のこの原稿を特に君に託するのは、君のおそらくは誰よりも僕を知っていると思うからだ。

どうかこの原稿の中に僕の阿呆さかげんを笑ってくれたまえ。ではさようなら。

編集者 ……決めちまったんですかい！ほんとにもう決めちま……

作家、ふらりと目覚める。

編集者、あわてて原稿を戻す。

作家、編集者に気づき。

作家 ん？ あ、君、まだいたのか。

編集者 え、ええ。おりますとも。俺は先生のおそばから一瞬たりとも離れやしません。

作家 すまないねえ、いつもいつも面倒かけて。

編集者 すまないだなんて、滅相もない！ これが俺の仕事ですから。そう、仕事ですから。

作家 でも、それも今日で終わりだ。

編集者 えっ？

作家、明るい表情で、原稿をとりだす。

編集者、うろたえる。

作家 出来たよ、約束の。ほら、全部。

編集者 あ、ああ……それは……

作家 苦労したよ。でも、何とか書きあげた。

編集者、タイトルを読む。

編集者 ……「或阿呆の一生」……

作家 ん？ うん、書いてみたよ。自分のことを。正直に。出来るだけ正直に。うまく行ったかどうかはわからないが、でも、出来るだけのことはした。

間に合うかい、締切りには。

編集者 え？ ええ、それはもう……。でも先生、手をお入れになるんでしょう。

作家 いや、もういい。これは、これで。

編集者 そ、そうおっしゃらずに。いつもなさっているじゃありませんか。ああ、気に入らん、文字と文字の間に雑音が混じってる、書き直す、もう一度、手を入れるって、こうびりびりと原稿用紙を……

作家 いや、ほんとにいいんだ。それに、締切りは、守らなくちゃ。ちゃんと、ちゃんとね。言ったらう。

僕は一度約束したことは、きちんと守る男だってね。

編集者 先生！

作家 ありがとう。いろいろと。ほんとうに。

じゃ、僕はこれからちよつと、行くところがあるから。

編集者 ど、どちらへ？

作家 いや、ちよつと。

編集者 俺も行く。お伴しますよ。

作家 いいんだ。一人で、行くから。僕は一人で……その方がいい。

編集者 そんな……先生……！



作家 頼むから、一人にしてくれなにか。

編集者 ああ、どうして……なんで……なんでそんなことを……いやだ！ いやだ！  
作家 頼むから……

編集者、作家にしがみつく。

作家、こぶしを握りしめている。

夏服の男が、ゆっくりと二人に歩み寄る。

夏服の男 あの、

作家 あ、あなたは、

夏服の男 ああ、やっぱり、君だ。よかったよ、声をかけてみて。

作家 はい。

夏服の男 ありがとう、同人誌、新思潮、送ってくれて。手紙も。

読みました。他の人のもの。

あなたのものは大変面白いと思いました。

落ち着きがあつてふざけていなくつて、上品な趣きがある。

それから材料が非常に新しい。文章も要領を得て能く整っています。

敬服しました。ああいうものを是から二、三十並べて御覧なさい。文壇で類のない作家になれます。もちろんいろいろ言う人もいます。

でもそんな事に頓着しないでずんずんお進みなさい。ずんずん、ずんずん、群衆は眼中に置かない方が身  
体の為がいい。

作家 はい。ありがとうございます。そのようにいたします。

そのように、必ず……

夏服の男 じゃ、私は、これで。

作家男 あ！

夏服の男 ずんずん、ずんずん……。

夏服の男、去る。

編集者 先生！

作家 書きます。ずんずん、ずんずん……

ただ、……ただもつと静かなところで、遠い遠い、遠いところで……僕は……

人々 ……は 見る

の時 みは 見る

たしかにそれは一本の

ほそいほそい蜘蛛のいと

蜘蛛の糸

きみは 見る たしかにそれは

のばす 手を のばす

その系 銀色の ほそいほそい系

天上から 垂れさがる一本の系 きみの上

作家、上着を脱いで白い錠剤の入ったビンをとり出す。

人々 つかむのぼる きみは のぼる

一本のほそいほそい系 輝く

のぼるのぼる きみは のぼる

手首 肘か たのあたり

背骨 腰骨 太股の付け根

膝 足の指 指先

巻きつけ たぐり たぐり寄せのぼる

引く 引き寄せ くい込む腕 二の腕

バラバラと錠剤を文机にこぼし、それから手ですくう。  
編集者、目をそらす。

人々 きみは 人を殺した 家を焼いた

あがる火の手 逃げまどう 人 人

人を殺した きみ は

盗 んだ騙したう そをついた

捨てた逃げたい くどもいくども

打ちつけ へし折り 骨の碎ける鈍い響きを

き みは聴いた

聴いて 笑った

そして そ して 墮ちた 墮 ちた

じ ご く の底 の底

作家、錠剤を手に持ったまま、立ちあがり。

作家 じゃ、行くよ。

編集者 ……

作家 もう決めたんだ。わかるだろ。

編集者 ……いやだ！ いやだ！

作家 君も、君は、元気で。元気で。

階段をのぼってゆく。

人々 は 見る

の 時 み は 見る

た し か に そ れ は 一 本 の

ほ そ い ほ そ い 蜘 蛛 の い と

天 上 か ら 垂 れ さ が る 一 本 の 糸 銀 の 糸

の ぼ る の ぼ る き み は の ぼ る

の ぼ り の ぼ り 振 り 返 る 見 下 ろ す

は る か 目 の 下 霞 お 閨 遠 い 炎 針 の 煌 め き

き み は 喜 ぶ 笑 う 笑 顔 の き み

天 は 近 い あ あ

編 集 者 先 生 !

作 家 、 振 り 返 り 。

作 家 ね え 、 君 、 僕 は 、 負 け た の か い ?

そ の ま ま で ス ト ッ プ モ ー シ ョ ン 。

照 明 、 妻 だ け に あ た っ て い る 。

## 7 エピローグ

妻が一人で座っている。手に切り取った新聞記事を持っている。

妻 主人が亡くなりました時、私はとうとうその時が来たのだと、自分に言いきかせました。

私は、主人の安らぎさえある顔を見て、

「あなた、よかったですね」

という言葉が出てまいりました。

私の言葉を聞かれた方は、冷たい女だと思われたかもしれません。

でも私は、主人の生きてゆく苦しみが、こんな形でしか解決出来ないところまで来ていたのかもしれないと、そう思ったのです。

死に近い日々は、責苦の連続のようでした。

今はどんなにかその苦痛が去り、安らかな思いであろうかと……

主人は、昭和二年の七月二十四日に亡くなりました。

最近の新聞に、気象庁の予報官が書いておられましたが、

「昭和二年七月二十三日は、イライラとかき立てられるような日で、連日三十度以上、この日は、水銀柱が三十五、六度、不快指数八十六とはね上った日で、作家芥川龍之介が亡くなったのは、暑苦しきにつづいた、二十四日未明、死の直後、寒冷前線が通り気温は一度に十度も下がり、東京は天然の冷房のよう

にひんやりした。」

本当にそのような日でありました。

いつも三十五歳頃の主人の姿しか浮かんで来ない私には、あれからの歳月が短いもののように思えたり、墓所にたてられた供養の卒塔婆が幾本も建てられているのを見ていると、もうそんなに歳月が過ぎたのかと驚いたりいたします。

あまり広くない墓地ですけれど、梅、木犀、山茶花、紅葉、柊、丁字、あじさい、檜など、皆それぞれに成長して茂っています。

木の陰はみな低くて狭く、その中に身を置いてみると、土の中から古い憶い出が、七月の熱気と共に立ちのぼってくるような気がいたします。

蝉の声。

妻、立ち上り、文机の上に原稿用紙とペンをプロローグと同じように整えて置く。

それから、正面奥の壁に、「忙中謝客」の札を掛ける。

妻と共に、全員、退場。

文机と札にだけ、照明。

ゆっくりりと、暗転。

幕。

追記

『芥川龍之介全集』（岩波書店）

『追想 芥川龍之介』（芥川文述、中野妙子記、筑摩書房）  
を参考にしました。

底本…『如月小春精選戯曲集』新宿書房

2001（平成13）年12月19日発行・初版